

富山県南砺市  
**高 畠 遺 跡**

一市道高畠城端栄町線道路改良工事に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(2)一

2010年3月

南砺市教育委員会

## 序

南砺市は、富山県の南西部に位置し、市内にはユネスコ世界遺産に登録された五箇山の合掌造り集落を代表として、数々の文化財が残されています。中でも埋蔵文化財については、分布調査や試掘調査によって、旧石器時代から近世に至る様々な時代の遺跡が市内に数多く残されていることが分かっています。近年の開発行為に伴って、大規模な発掘調査も行われ、多くの掘立柱建物や竪穴住居跡、石器や土器、陶磁器などが見つかりました。

今年度は、市道高畠城端栄町線改良工事に先立って、高畠遺跡の発掘調査を実施しました。本書はその調査成果をまとめたものです。郷土の歴史の解明に活用していただければ幸いです。

この調査の実施にあたり、富山県土木部、南砺市シルバー人材センター、地元高畠地区のみなさまには多大な協力を賜りましたことに、深く感謝申し上げます。

平成22年3月

南砺市教育委員会

教育長 浅田 茂

## 例　　言

1. 本書は市道高畠城端栄町線改良工事に伴う富山県南砺市高畠遺跡の発掘調査概要である。
2. 調査は南砺市土木課の依頼を受け、南砺市教育委員会文化課が実施した。現地調査および報告書作成については南砺市教育委員会文化課の管理の下、日本海航測株式会社が実施した。調査面積は 1,442 m<sup>2</sup> である。
3. 現地調査は南砺市教育委員会文化課主任 宮崎順一郎の監督の下で、日本海航測株式会社 茂原雄大・竹中庸介が担当した。報告書の執筆は I・II を宮崎順一郎が、そのほかを茂原雄大・竹中庸介が行った。
4. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々の協力・助言があった。記して謝意を表する。  
河村健史・藤澤良祐・堀内秀樹・的場茂晃・山本孝一・山本信夫・山本麻里子・吉岡康暢  
(敬称略・五十音順)
5. 本書で使用した方位は真北である。土層の観察には、小出正忠・竹原秀雄編著 1967『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社を用いた。
6. 調査参加者は次のとおりである。

(発掘作業)

天池秋夫・荒健一・上島勝枝・太田賢一・大西好夫・小川和夫・川向由一・北川靖夫・小林美代子  
坂下 弘・佐々木たつえ・沢田正夫・滝谷 昂・田中清文・田中 稔・棚田賢進・道順優吉・谷山幸男  
西村 敏・林 長敏・溝口 清・宮丸登喜雄・柳原義雄・山田和男・山田哲治・山田敏之・山村美喜子  
湯浅 雅  
(敬称略・五十音順)

(遺物整理作業)

荒井恵子・梅田聖子・久保怜子・鈴木和子・鈴見徳子・田口順子・中村洋子・橋本一恵・村島和美  
山口美和子  
(敬称略・五十音順)

## 目　　次

|                       |    |                         |    |
|-----------------------|----|-------------------------|----|
| I 位置と環境.....          | 1  | 参考文献.....               | 14 |
| 第1図 高畠遺跡と周辺の遺跡.....   | 1  | 第6図 高畠遺跡4地区 平面図.....    | 15 |
| II 調査に至る経緯と経過.....    | 2  | 第7図 高畠遺跡4地区的遺構（1）.....  | 16 |
| 第1表 調査経過.....         | 2  | 第8図 高畠遺跡4地区的遺構（2）.....  | 17 |
| 第2図 高畠遺跡4地区的位置.....   | 2  | 第9図 高畠遺跡4地区的遺構（3）.....  | 18 |
| III 調査の概要.....        | 3  | 第10図 高畠遺跡4地区的遺構（4）..... | 19 |
| 1. 調査の方法.....         | 3  | 第11図 高畠遺跡4地区的遺構（5）..... | 20 |
| 第2表 グリッド座標数値（抜粋）..... | 3  | 第12図 高畠遺跡4地区的遺構（6）..... | 21 |
| 第3図 高畠遺跡4地区的調査区割..... | 3  | 第13図 高畠遺跡4地区的遺物（1）..... | 22 |
| 2. 高畠遺跡4地区的概要.....    | 4  | 第14図 高畠遺跡4地区的遺物（2）..... | 23 |
| （1）地形と基本層序.....       | 4  | 第15図 高畠遺跡4地区的遺物（3）..... | 24 |
| 第4図 高畠遺跡4地区的基本層序..... | 4  | 第16図 高畠遺跡4地区的遺物（4）..... | 25 |
| （2）遺構の概要.....         | 4  | 第17図 高畠遺跡4地区的遺物（5）..... | 26 |
| 第5図 SB・SA軸方向一覧 .....  | 4  | 第3表 出土遺物観察表.....        | 26 |
| （3）遺物の概要.....         | 9  |                         |    |
| IVまとめ.....            | 14 |                         |    |

図版

報告書抄録

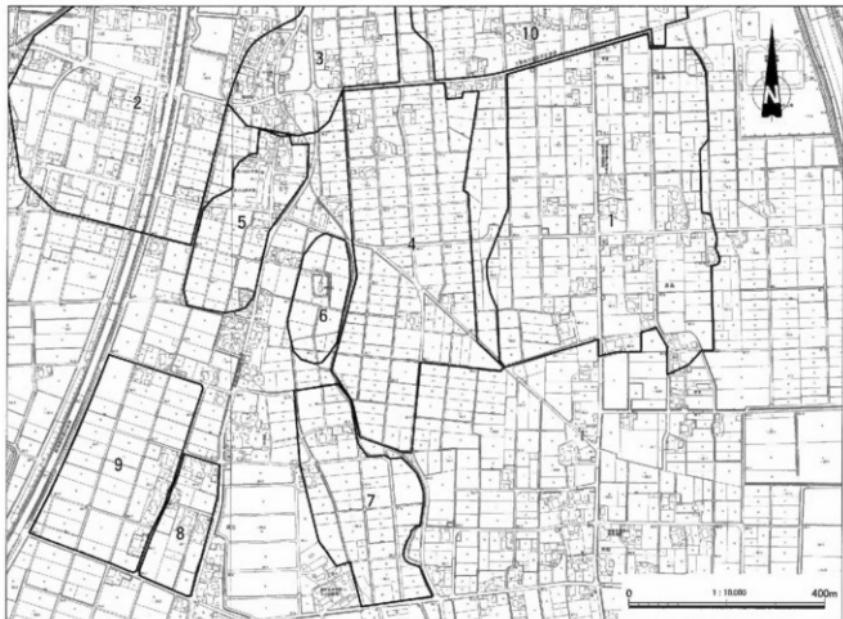
## I 位置と環境

富山県南砺市は、西側を石川県、南側を岐阜県との県境をなす富山県の南西部に位置する。市の西側から南側にかけては、養老3年(719)、泰澄大師によって開山されたといわれる靈峰医王山をはじめとするなだらかな山脈が連なる。市の南側に位置した門山に源を発する小矢部川が、その支流とともに平野部を形成する。福光の市街地は主に小矢部川沿いに展開し、小矢部川とその支流である山田川にはさまれた段丘には小河川が縦横に走り、それらを利用した田地が広がる。

高畠遺跡は、小矢部川の支流である山田川左岸、河岸段丘上に立地する。標高約76~81mを測る当遺跡は、縄文、古代、中世の遺跡として周知されている。

周辺には、神成遺跡、宗守II遺跡、鍛冶遺跡、東殿III遺跡、東殿IV遺跡など遺跡が密集しており、近年の調査で縄文時代後期の遺構、奈良・平安時代の住居跡や中世の建物跡が数多く発見されている。

また、文献資料によると、福光町の一部が礪波川上郷に含まれていたとされる。平安時代には川上村と呼ばれる官倉がおかれていた事が知られる。その後11世紀には円宗寺領石黒荘が成立し、当地域はそのうちの山田郷の一部に含まれる。



第1図 高畠遺跡と周辺の遺跡 (S=1:10,000)

- |               |           |          |             |           |
|---------------|-----------|----------|-------------|-----------|
| 1.高畠遺跡        | 2.梅原胡摩堂遺跡 | 3.宗守遺跡   | 4.宗守II遺跡    | 5.宗守III遺跡 |
| 6.宗守城・宗守寺屋敷遺跡 | 7.鍛冶遺跡    | 8.鍛冶三十三塚 | 9. THJ-15遺跡 | 10.神成遺跡   |

## II 調査に至る経緯と経過

市道高畠城端栄町線は、富山県南西部の南砺市高畠と城端中心市街地を結び、国道304号と主要地方道金沢井波線を連絡する総延長約4.3kmの幹線道路である。

平成14年（2002）、旧福光町で市道高畠城端栄町線（旧町道高畠利波河線）について拡幅等の改良計画が策定された。改良工事は、路線南側より北に向かって施工する計画となっていた。しかし、計画路線地内には古墳時代、古代、中世の集落跡として徳成Ⅱ遺跡、古代、中世の集落跡として東殿Ⅳ遺跡が存在することが確認された。また、県営担い手育成基盤整備（ほ場整備型）北山田中部東地区の実施に伴う試掘調査によりさらに古代、中世の集落跡である高畠遺跡が確認された。

平成15年度に当時の文化財保護担当部局である福光町教育委員会（以下町教委）が、平成17年度および20年度には市町村合併によって南砺市教育委員会文化課（以下市文化課）が路線の拡幅箇所にあたる田面について個別に試掘調査を実施したところ、それぞれ徳成、東殿、高畠において古代、中世の遺物包含層、遺構が良好な状態で遺存していることがわかった。

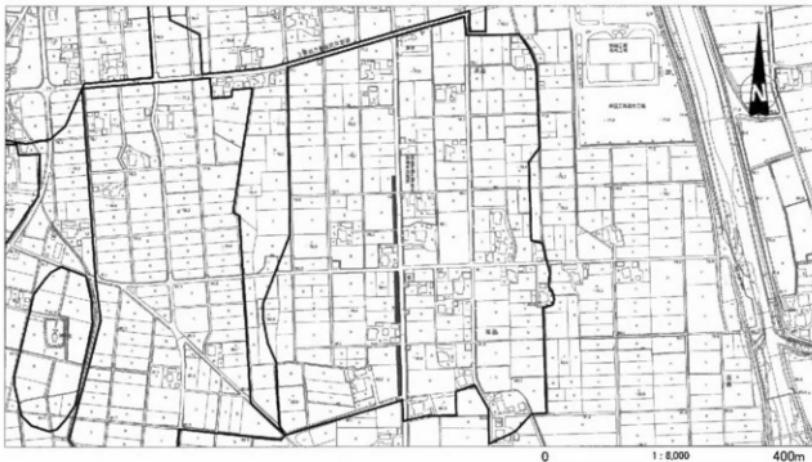
この試掘結果をふまえて、平成15年度には福光町開発課と町教委が、平成17年度以降は南砺市土木課と市文化課が協議を行い、遺存状況が良好な場所については施工前の本調査を実施することが決定した。

なお、すべての年度で年間を通じて、市文化課は県営ほ場整備事業にかかる本調査を実施することが決定しており、改良工事施工前に市文化課が直営で調査を実施することが困難な状況であったことから、市文化課監理の下、民間調査会社が本調査を実施することとなった。

本調査の面積は第1表のとおりである。

第1表 調査経過

| 年度     | 遺跡名     | 本調査面積               | 備考        |
|--------|---------|---------------------|-----------|
| 平成16年度 | 徳成Ⅱ遺跡   | 800m <sup>2</sup>   | 民間調査会社へ委託 |
| 平成18年度 | 東殿Ⅳ遺跡   | 280m <sup>2</sup>   | 民間調査会社へ委託 |
| 平成21年度 | 高畠遺跡4地区 | 1,442m <sup>2</sup> | 民間調査会社へ委託 |



第2図 高畠遺跡4地区の位置 (S=1:8,000)

### III 調査の概要

#### 1. 調査の方法

発掘調査は試掘調査の結果に基づき、まず重機により表土掘削を行った。発掘調査区の現況は水田と畑であり、耕作可能な状況に復旧する必要があったため耕作土と盛土（基盤土）を分けて掘削し、調査区間の指定された用地に仮置きした。

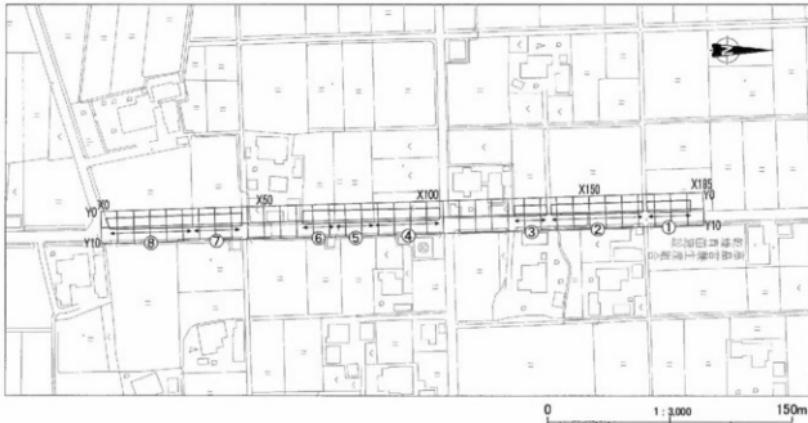
表土掘削後にグリッド杭を設置した。グリッドは国土座標（世界測地系第VII系）を用い、発掘調査区の形状に沿って設定した。南北方向をX軸、東西方向をY軸、2mを一区画としており、グリッド名は南から北へ2m進むとXの値が1増え、西から東へはYの値が1増える。参考までに北端と南端のグリッド座標数値を第2表にあらわす。

一部截ち割りを入れ層位を確認しながら、人力による包含層掘削、遺構検出、遺構掘削を行った。遺構は検出後に、縮尺1/100で概略図を作成し、遺構の種類ごとに通し番号をつけた。遺構の掘削は、埋土の堆積状況を観察するために半截するか、セクションベルトを残して掘削し、縮尺1/20で土層断面図の作成や土層断面写真の撮影などを行い、それらの記録作業が終わりしだい完掘した。人力掘削により生じた堆土は人力により指定された用地に搬出した。遺構完掘終了後、ラジコンヘリコプターによる図化用の空中写真撮影を行い、あわせて俯瞰・斜め撮影を行った。

出土遺物は、現地作業と並行して洗浄・バインダー処理・注記・仕分け作業を行った。接合・復元は現地作業終了後に行なった。遺物実測は縮尺1/1で行い、トレースはデジタルトレースを基本とした。写真や図面はファイルにまとめ、出土遺物は報告書の写真図版のとおりに整理箱に収めた。また、それ以外の遺物は遺構毎、グリッド毎にまとめて整理箱に収めた。

第2表 グリッド座標数値（抜粋）

| グリッド名 | X 座標       | Y 座標        | グリッド名  | X 座標       | Y 座標        |
|-------|------------|-------------|--------|------------|-------------|
| X0Y0  | 61348.5951 | -22759.8649 | X180Y0 | 61718.4062 | -22771.6879 |
| X5Y5  | 61348.9151 | -22749.8700 | X185Y5 | 61718.7262 | -22761.6930 |



第3図 高畠遺跡4地区の調査区割

(S=1:3,000)

## 2. 高畠遺跡 4 地区の概要

### (1) 地形と基本層序 (第3・4図)

高畠遺跡は山田川左岸地域にあたり、河岸段丘上に立地する。今回調査を行った高畠遺跡4地区は高畠遺跡のほぼ中央に位置する。

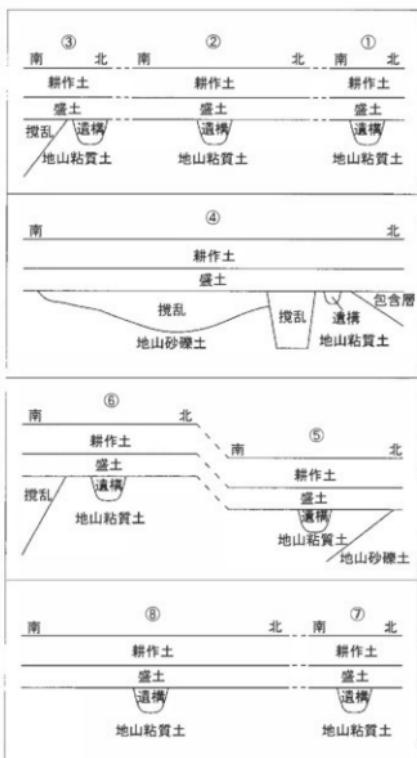
地形は⑤・⑥部の境においては地山に約0.5mの高低差が存在する以外は、南から北にかけて緩やかに傾斜しており、⑧部南端で81.75m、①部北端で78.10mを測る。地表から地山までの深さは約0.3~0.4mである。

土層は下層から地山、前回は場整備時の盛土、耕作土の順に堆積している。地山は①~③部においては灰色粘質土、④~⑧部ではにぶい黄橙色粘質土となり、地山の色調が大きく異なる。また、灰色粘質土の地山はにぶい黄橙色粘質土の地山に比べ粘性が高く、透水性が低いため、遺構検出や遺構削などの人力掘削が困難な土層であった。

遺物包含層（黒色粘質土）は④部北側でのみ確認できるが、遺物の出土量はごくわずかである。

### (2) 遺構の概要 (第6図、図版1)

高畠遺跡4地区では、掘立柱建物跡2棟、柵列3列、井戸1基、土坑22基、溝15条、ピット67基を確認した。



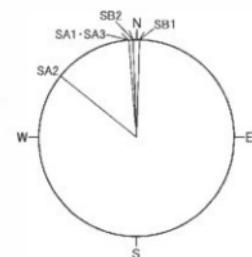
第4図 高畠遺跡4地区の基本層序

### SB1 (第7図、図版4)

X40~42、Y3に位置する。柱穴が直線的に等間隔で並ぶため、掘立柱建物跡と考えた。南北方向に2間、東西方向は調査区外に延びると考えられる。建物の軸方向はN-2°-Eであり、ほぼ真北を向く。柱間は約2.2mを測り、全長は柱穴の心々距離で4.5mを測る。柱穴の平面形は直径約0.20~0.25mの小ぶりな円形で、深さは全て0.14mである。柱穴の深さが浅いため、場整備時に上部が削平されていると考えられる。柱穴から遺物は出土しなかった。

### SB2 (第7図、図版4)

X155~158、Y3に位置する。柱穴が直線的に等間隔で並ぶため、掘立柱建物跡と考えた。南北方向に3間、東西方向は調査区外に延びると考えられる。建物の軸方向はN-2°-Wであり、ほぼ真北を向く。柱間は1.8~2.0mを測り、全長は柱穴の心々距離で5.5mを測る。P1・P3・P4の柱穴の平面形は直径約0.2~0.3mの小ぶりな円形で、深さは0.1m程度である。P2は暗渠やSD12により切られ、柱穴の



第5図 SB・SA軸方向一覧

規模が判然としないが、他の柱穴よりも大きく、直径約0.8m、深さ0.34mの柱穴に復元できる。SB 1と同様、柱穴の深さが浅いため、は場整備時に上部が削平されていると考えられる。各柱穴から遺物は出土しなかった。SD12との切り合い関係より、15世紀前半以前に構築された可能性が高い。

#### SA 1（第7図、図版2・3）

X146～151、Y 2 に位置する。柱穴の間隔が一定していないが柱穴が南北方向に直線的に並ぶこと、東西方向には連続しないことから柵列と考えた。軸方向は N-5° - W であり、SA 3・SB 1・SB 2 と同様の軸方向を示す。柱間は P1-P2 間で約2.4m、P2-P3 間で約3.5m、P3-P4 間で1.8m、P4-P5 間で2.7m を測り、全長は柱穴の心々距離で10.4m を測る。柱穴の平面形は P1・P2・P5 が楕円形、P3 が隅丸方形、P4 は搅乱により切られるが楕円形か。P4 のみに芯持ち材の柱根が遺存するが、腐朽が著しい。

柱穴の深さは北から南に行くにつれ深さが深くなり、P1 で0.08m、P2 で0.10m、P3 で0.20m、P4 で0.44m、P5 で0.50m を測る。本調査区はは場整備により上部が削平されていると考えられるため、P1-P2 間、P2-P3 間、P4-P5 間の柱穴は消失してしまった可能性がある。P5 から17世紀～18世紀前半に比定される陶磁器類（1～4）が出土した。

#### SA 2（第8図、図版2・3）

X144～145、Y 4 に位置する。柱穴が北西・南東方向に直線的に並び、また間隔が心々距離で約2.0m であること、軸と垂直方向には柱穴が存在しないこと、周辺に柵列 SA 1・SA 3 が存在することから柵列と考えた。軸方向は N-51° - W であり、他の柵列とは大きく異なる。柱穴の平面形は直径約0.7～0.8m の比較的大きな円形で、深さは P1 で約0.4m、P2 で約0.6m を測る。SA 3との切り合い関係はないため前後関係は不明である。P2 から越前焼小片（5）が出土した。

#### SA 3（第8図、図版2・3）

X143～145、Y 5 に位置する。柱穴が南北方向に直線的に並ぶが、東西方向には連続しないため、柵列と考えた。P4 は欠番であり、北から P5、P1、P2、P3 となる。軸方向は N-5° - W であり、SA 1 と同様の軸方向を示す。柱間は約1.8m で、全長は柱穴の心々距離で5.3m を測る。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形である。深さは北側 P5 が一番深く0.7m を測り、南側へ行くにつれ浅くなり P3 で0.22m となる。P3 から越中瀬戸焼（6・7）が出土し、これらの遺物から17世紀～18世紀頃の柵列と考えられる。

#### SE 1（第9図、図版4）

X161、Y 3～4 に位置する石組の井戸である。石組部分で直径約1.0m、深さ0.64m を測る。掘り方を含めると長軸1.60m、短軸1.45m を測る。SD12を掘り込んで構築し、扁平な楕円形の川原石を4～7段組む。底面にも川原石を敷き詰める。井戸埋土②層上面から伊万里焼碗（8）が出土しており、17世紀中頃以降に埋没したと考えられる。裏込め土①層からは遺物は出土しなかった。

#### SK 3（第9図、図版5）

X32、Y 3 に位置する。長軸1.6m、短軸1.3m、深さ1.28m を測る楕円形の土坑である。断面形は一部

オーバーハングする箱型を呈する。底面は湧水層にまで達しており、素掘りの井戸の可能性がある。埋土は3層に分かれ、越前焼甕（10）は①・②層の層界から出土している。

#### SK4（第9図、図版5）

X38～39、Y4～5に位置する。長軸2.7m、短軸2.4m、深さ0.33mを測る楕円形の土坑である。断面形状は弧状で、立ち上がりは緩やかである。埋土は2層に分かれ、珠洲焼甕（11）は①層中から出土している。

#### SK6（第9図、図版5）

X27、Y3～4に位置する不整形の土坑である。北側・西側には深さ約0.2mと浅く、立ち上がりの緩やかな平坦部が舌状に張り出す。最深部の深さは0.64mを測り、形状は半円形で垂直に立ち上がる。埋土は4層に分かれ、遺物の大半は炭化物を多く含む②層中から出土している。

#### SK12（第9図、図版5）

X154から155、Y4～5に位置する。長軸1.3m、短軸1.1m、最深部の深さ0.82mを測る円形の土坑である。断面形状は北側でオーバーハングしつつ、ほぼ垂直に立ち上がる。南側は途中に平坦部をもち、やはり垂直に立ち上がる。⑥層中からは桶底（28）が出土している。

#### SK15（第10図、図版5）

X152、Y5に位置する。長軸約1.5m、短軸約0.9m、深さ1.0mを測る楕円形の土坑である。埋土はオリーブ黒色粘質土で、1～50cm大の粒径が揃わない大量の石が埋め込まれている。石は組んだり締め固めているというよりは、しまりがなく半截途中で逆側が崩れてくるような埋土であるため、石と共に埋め戻されたゴミ穴のような性格と想定される。遺物としては近世陶磁器が出土し、有機質のものは確認されなかった。出土遺物から18世紀後半以降の土坑と考えられる。

#### SK16（第10図）

X152～153、Y5に位置し、SK15と隣接して存在する。直径約0.9mの円形を呈し、SK15と同様10～30cm大の粒径が揃わない礫を多く含む。深さは0.46mと他のゴミ穴と想定される土坑よりは浅い。遺物は出土しなかった。

#### SK21（第10図、図版5）

X136、Y3に位置する。長軸約1.0m、短軸約0.8mの楕円形の土坑である。約2.0m南側にはほぼ同規模のSK22が存在する。断面形状は半円形で、ほぼ垂直に立ち上がる。埋土は5～30cm大の比較的大な礫を多含するオリーブ褐色粘質土である。SK15と同様ゴミ穴のような性格の土坑であろうか。遺物としては近世陶磁器が大量に出土し、木屑など有機質のものが若干確認された。出土遺物は伊万里焼染付碗2点、底部片の未実測1点を含め陶胎染付碗が6点、呉器手陶器碗2点、越中瀬戸焼広口壺2点、伊万里皿・刷毛目唐津碗・擂鉢・越前焼甕それぞれ1点である。碗・壺は2点1セットで使用され、廃棄されたことが窺える。陶胎染付碗の文様を見ると、唐草文3点、松文（草花文）2点、未実測文様不明1点となる。未実測のものを唐草文と考えると、唐草文4点2セツト、松文（草花文）2点1セツトとなる。これらの出土遺物から18世紀後半以降の土坑と考えられる。

#### SK22（第10図、図版6）

X135、Y3に位置する。直径約1.2m、短軸約0.8mの楕円形の土坑である。約2.0m北側にはほぼ同規模のSK21が存在する。断面形状は半円形で、ほぼ垂直に立ち上がる。埋土は5~30cm大の比較的大きな礫を多含するオリーブ褐色粘質土である。SK21と同様な掘り方・埋土であり、やはりゴミ穴のような性格の土坑であろう。遺物としてはSK21よりは出土量が少ないものの近世陶磁器が多く出土した。有機質のものは確認されなかった。出土遺物から18世紀後半以降の土坑と考えられ、SK21とはほぼ同時期の土坑と考えられる。

#### SD2（第10図、図版6）

X38、Y3~5に位置する。現存長6.37m、幅0.8m、深さ0.1mを測る直線の溝である。東西両端とも調査区外に延びる。断面形状は弧状で緩く立ち上がる。埋土は黒褐色粘質土で、浅黄色シルトを微量含む。青磁碗（55）が出土した。

#### SD3（第10図、図版6）

X7~9、Y3~5に位置する。途中に平坦部がある二段掘りの形状を呈する。土師器皿が4枚出土した。57、58は完形で、58は全形に復元できる。59は欠損した状態での出土である。土師器皿は全て見込みを上に向かって、底面から浮いた状態で出土した。

#### SD4（第11図、図版6）

X14~19、Y3~5に位置する。X16付近で深くなる。オリーブ黒色砂とシルトが互層に堆積する箇所があること、底面に砂が堆積すること、埋土が灰色や青灰色系を呈すことから、土層が強い嫌気状態におかれていたと考えられ、長期間にわたり水に飽和された場所であった可能性が高いこと、の3点から旧河川と考えた。出土遺物は11世紀末~14世紀前半までと時期幅は長い。

#### SD7・SD9・SD10（第11図、図版6・7）

X79~83、Y3~5に位置する。切り合い関係から造構の構築順序はSD9→SD10→SD7となる。SD9・SD10からは遺物は出土しなかったが、SD7から刷毛目唐津碗（68）・陶胎染付碗（69）が出土した。他にも繩文土器、珠洲焼が出土しているが、これらは流れ込みと考えられる。

SD7からの出土遺物により、SD9・SD10は18世紀前半以前、SD7は18世紀前半以降に帰属すると考えられる。

#### SD12（第11図、図版7）

X155~164、Y3に位置する。大部分が調査区外に延びるため全形は不明だが、現状で長さ約19m、最大幅約1.9m、深さ0.66mであり、一部途中に平坦部がある二段掘りの形状を呈する。造構の辺縁部には杭（78）が打ち込まれている箇所があるが、連続するのかなどは不明である。出土遺物は11世紀後半~17世紀前半と時期幅は長い。

#### P1（第12図）

X31、Y5に位置する。直径約0.6mの円形を呈する。断面形状は中央がわずかに隆起する弧状で、立ち

上がりは緩やかである。埋土は黒褐色粘質土で、浅黄色粘質土をわずかに含む。遺物は出土しなかった。

#### P7 (第12図)

X42、Y4に位置する。長軸1.0m、短軸0.8mを測る楕円形を呈する。底面は平坦で、立ち上がりは緩やかである。埋土は2層に細分され①層は黄灰色粘質土、②層はオリーブ褐色粘質土を呈し、共に色調は淡い。遺物は出土しなかった。

#### P8 (第12図)

X25、Y4～5に位置する。長軸1.1m、短軸0.8mを測る楕円形を呈する。底面は平坦で、立ち上がりは緩やかである。埋土は黒褐色粘質土で、炭化物をわずかに含む。遺物は出土しなかった。

#### P9 (第12図、図版7)

X22、Y3～4に位置する。直径0.7mの円形を呈する。底面は平坦で、立ち上がりは緩やかである。埋土は暗灰黄色粘質土で、鉄分を含むため部分的に明黄褐色を呈する。遺物は出土しなかった。

#### P23 (第12図、図版7)

X160、Y6に位置する。東側が調査区外に延び、現状で長軸0.30m、短軸0.25mを測り楕円形を呈すると考えられる。埋土はオリーブ黒色粘質土であり、暗緑灰色粘質土を30%、黄褐色粘質土を微量含む。伊万里焼碗(79)・火鉢と思われる石製品(80)が出土した。

#### P39 (第12図、図版7)

X162、Y3に位置する。一部調査区外に延びるが、平面形は楕円もしくは隅丸方形と思われる。断面形状は箱型を呈し、深さは約0.4mである。SD12を掘り込んで構築する。土師器皿(81)、唐津焼水差(82)が出土した。

#### P68 (第12図、図版7)

X160、Y3～4に位置する。①層と②層の層界付近で0.1mほどくびれたのち、0.06mほど袋状に膨らむため、断面形状はいわゆるフラスコ状を呈する。深さは0.5mを測る。遺物は出土しなかった。

#### 縄文土器出土地点1 (第12図、図版7)

X102、Y4で検出した、縄文土器深鉢(85)である。本地点周辺は地山が緩やかに落ち込み、遺物包含層が堆積するが、落ち込みの肩部と裾部のほぼ中間である標高79.63m地点から出土した。出土層位は遺物包含層と地山の層界付近である。出土地点に掘り方は確認できなかったことから、埋設されたものではないと考えられる。

#### 縄文土器出土地点2 (第12図、図版7)

X76、Y4で検出した、縄文土器深鉢(89)である。口縁部・底部の全て、胴部の一部を欠損し、内面を上に向けた状態で、地山直上の標高80.21m地点にまとまって出土した。出土地点に掘り方は確認できなかったことから、埋設されたものではないと考えられる。

### (3) 遺物の概要

出土遺物には縄文土器、中世土師器、珠洲焼、瀬戸焼、青花、青磁、白磁、肥前系陶磁器がある。なお、珠洲焼については吉岡康暢氏の研究成果（吉岡1994）に、土師器皿・漆器については梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告書（1996）に、瀬戸焼については藤澤良祐氏の研究成果（藤澤2008）に、中国製陶磁器については大宰府市教育委員会（2000）や『貿易陶磁研究』公表成果を参考にした。

#### SA 1—P 5（第13図、図版8）

1・2は呉器手陶器碗である。全面に施釉され、微細な貫入が顕著である。1の畳付は釉を剥ぎ取り露胎とする。1・2共に17世紀後半～18世紀前半に比定される。3は唐津焼碗で、船釉が施される。17世紀代におさまるものと考えられる。4は越中瀬戸焼の折縁皿と考えられる。口縁部には鉄釉が施される。

#### SA 2—P 2（第13図、図版8）

5は越前焼壺の胴部片である。焼成は良好で硬く焼きしまり、色調は赤褐色を呈する。

#### SA 3—P 3（第13図、図版8）

6・7は越中瀬戸焼である。6は皿の口縁部片であり、鉄釉が施釉され、器壁はやや薄い。外面口縁端はナデにより屈曲し、口唇部は錦状となる。7は擂鉢の口縁部片である。口縁部に縁帶が付き、下端は垂下する。全面に鉄釉が施釉される。

#### SE 1（第13図、図版8）

8は伊万里焼の碗である。高台脇に2本の圓線を入れ、体部には植物の葉文が描かれる。17世紀中頃に比定される。

#### SK 3（第13図、図版8）

9は非クロコロ成形の土師器皿である。底部から体部にかけて直線的に立ち上がる。口縁部は一段ナデを施し、口縁端部は丸くおさまる。ND II類に属する。13世紀後半に比定される。

10は越前焼壺の底部片である。内面はヨカナデにより成形され、一部指頭圧痕が浅く残る。外面はヘラ状工具によりナデ上げて成形している。焼成はやや不良で橙褐色を呈す。

#### SK 4（第13図、図版8）

11は珠洲焼壺の口縁部片である。口縁形態は嘴頭状で、端部はやや垂下する。12世紀末～13世紀前半(I期～II期)に比定される。

#### SK 6（第13図、図版8）

12～20は非クロコロ成形の土師器皿である。ND II類、NG類、NC I類の3型式に属する。12～16・18・19はND II類に属する。13世紀後半か。17は強い一段ナデにより口縁端部は三角形状を呈し、内面見込み周縁はやや窪む。NG類に属し、13世紀後半～14世紀前半に比定される。20は口縁部が若干内反し、口縁端部が肥厚する。NC I類に属し、13世紀後半～14世紀前半に比定される。

21は瀬戸「尾張型」の小皿（山皿）で、口径8.5cm、底径5.7cm、器高1.8cmを測る。内湾気味に立ち

上がり底面には回転糸切り痕をとどめる。内面見込みは非常に平滑であり、使用の結果と思われる。13世紀後半に比定される。

22～23は珠洲焼である。22は壺の口縁部片である。口縁形態は方頭状で、頸部は「く」の字に外反する。13世紀後半（Ⅲ期）に比定される。23は擂鉢の底部片である。器体は底部からほぼ直線的に立ち上がる。卸し目は幅2.6cmの直線文であり、一単位17条であるが、卸目は器面に対してやや右上から描刻するため、17条とならない箇所もある。13世紀後半（Ⅲ期）に比定される。

24は龍泉窯系の青磁壺であり、口縁外面が外反する。13世紀中頃～14世紀初頭に比定される。

25は龍泉窯系の青磁碗である。鍋蓮弁であり13世紀後半に比定される。

26は白磁の皿である。やや黄味を帯びる釉は底面から外面下半は施釉されず、外面には化粧土が施される。見込みには段を有する。11世紀後半～12世紀前半に比定される。

27は不明鉄製品で、両端は折損する。断面円形を呈し、鋸ぶくれ部には木質が付着する。

#### SK12（第13図、図版12）

28は桶の底板である。一部欠損した状態で出土した。直径約20cmに復元できる。

#### SK15（第14図、図版9）

29は吳器手陶器碗である。内面は微細な貫入が顕著である。17世紀後半頃か。30は唐津焼の碗であろう。疊付き以外オリーブ灰色の釉薬が施され、内面は打ち刷毛目である。31は陶胎染付の碗である。焼成失敗のため釉薬が乳白色を呈する。疊付きのみ露胎である。18世紀後半に比定される。32・33は越中瀬戸焼皿の底部片で、32は糸切り高台、33は削り出し高台であり、共に見込みに釉止めの段を持たない。18世紀頃か。34は青緑釉の蛇の目釉剥ぎ唐津皿である。17世紀後半～18世紀前半に比定される。

#### SK21（第14図、図版9・10）

35は伊万里焼の皿である。見込みに蛇の目釉剥ぎがなされる以外は前面に施釉されており、疊付には砂が付着する。内面の文様は松葉文か。18世紀に比定される。

36・37は伊万里焼の丸筒状の碗である。36は高台脇に2本の圓線を入れ、体部には椿文、松文、桶内にしだれ桜文が描かれる。高台内は1本の圓線内に崩れた「大明年製」銘が入る。割れ口には漆と思われる補修痕がある。18世紀に比定される。37は体部外面に團鶴文と松のコンニャク印判を押す。18世紀前半～中頃に比定される。

38～40は陶胎染付の碗で、外面に唐草文を描く。全てに貫入が入るが、38の内面は使い込んだためか、貫入の色合いが変化する。18世紀後半に比定される。

41は陶胎染付の碗で、外面に松文を描く。18世紀後半に比定される。

42は陶胎染付の碗で、外面に草花文を描く。二次的な被熱のため釉薬が乳白色を呈し、染付の発色が不良となる。疊付は使用のためであろうか、全面にわたり擦れている。18世紀後半に比定される。

43は刷毛目の唐津碗で、17世紀後半～18世紀前半に比定される。

44・45は吳器手陶器碗で、17世紀後半～18世紀前半である。

46は産地不明の擂鉢である。卸し目は7.0cmと幅広で、一単位20条である。卸目は器面に対してやや右上から描刻するため、先端は心もち一方に偏して深く突き立てる。口縁部は肥厚し、外反する。内外面には鉄釉が施釉される。肥前陶器とも考えられるが、在地産の可能性もある。18世紀後半以降に比定される。

47・48は越中瀬戸焼の鉄釉広口壺である。口径は47が11.8cm、48は12.2cm であり、器高は47が9.1cm以上、48は9.7cm であり、48がやや口のすばまりが小さい。48の底部には右方向の回転糸切痕をとどめる。49は越前焼の壺である。体部はやや内弯しながら立ち上がり、肩部は張らず上胴で緩やかに屈曲する。口縁部は逆三角形状を呈し、口縁端部は面をもつ。肩部には鋭利な工具による窯印が施される。内外面全体に褐色の塗り土が掛け流されている。18世紀前半に比定される。

#### SK22 (第15図、図版10)

50は陶胎染付の碗で、口縁部には四方櫻文、体部に唐草文が描かれる。18世紀後半に比定される。

51は越中瀬戸焼の折縁皿と考えられる。全面に鉄釉が施される。

52・53は青緑釉の蛇の目釉刺ぎ唐津皿である。17世紀後半～18世紀前半に比定される。

54は笏谷石製の石製品である。長軸の一面と短軸の一面が平滑に調整される。長辺の一方とその対向位置に施溝が施され、さらにその間をつなぐように同様の施溝が施される。施溝箇所で分割されていることから、施溝は分割の際の割付けと考えられる。

#### SD 2 (第15図、図版10)

55は龍泉窯系の青磁碗底部片である。高台脇にはカンナ目が巡り、高台内は露胎である。見込みにはスタンプが押捺され、片切形による沈線が巡る。12世紀中頃から12世紀後半に比定される。

#### SD 3 (第15図、図版10)

56～59は非クロコロ成形の土師器皿である。56～58は底部から体部にかけて直線的に立ち上がる。口縁部は強い一段ナデを施すため、体部の立ち上がり部分がやや内反する。13世紀後半に比定される。59は底部から体部にかけてやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は短い。器壁は56～58よりも厚く、見込み中央の膨らみが顕著である。外底部の一部に煤が付着する。13世紀～14世紀頃か。いずれも ND II 類に属する。

60は珠洲焼甕の口縁部片である。やや水平気味に挽き出す方頭を呈する。13世紀末～14世紀初め（IV期）頃か。

#### SD 4 (第15図、図版11)

61～63は非クロコロ成形の土師器皿である。61は底部から体部にかけてやや丸みを帯びて立ち上がる。内面全体と外面口縁部に煤が付着する。ND II 類に属し、13世紀後半に比定される。62は底部から体部にかけて丸みを帯びて立ち上がる。口縁部に強い一段ナデを施すため、体部から口縁部にかけて S 字状に屈曲する。口縁端部は摘み上げ、内面には摘み上げの際の溝が巡る。NC I 類か。63は一段ナデ下位から底部を指揮さえにより深みを持たせ平底気味を作り出す。NC I 類に属し、14世紀前半に比定される。

64は珠洲焼甕の口縁部片である。口縁形態は嘴頭状で、やや上方に挽き出す。12世紀末～13世紀前半（I期～II期）に比定される。

65・66は珠洲焼甕の口縁部片である。口縁形態は嘴頭状で、端部はほぼ水平ないしやや垂下する。比較的長い頸部はコの字に外反する。焼き締めはやや不良で軟質である。13世紀前半（II期）に比定される。

67は白磁皿の底部片である。外面下半でごくわずかに屈曲し、その内底には沈線が入る。体部外面下半から底部にわたり露胎である。11世紀後半～12世紀後半に比定される。

#### SD 7 (第15図、図版11)

68は刷毛目の唐津碗で、17世紀後半から18世紀前半に比定される。69は陶胎染付の碗で、18世紀に比定される。

#### SD12 (第15・16図、図版11・12)

70は青花小碗である。口縁は端反りで、口紅を施す口唇部は欠損しているが、端部は丸くおさまると考えられる。外面には如意頭が連続する。見込みには二重圓線内に「寿」字文があり、陽刻された菊弁が巡る。高台は内傾した謫高台であり、高台内面付け根は釉切れする。高台付け根に圓線、外面立ち上がり部に二重圓線が施される。割れ口には漆によると思われる補修痕がある。14世紀後半～15世紀前半に比定される。

71は景德鎮の白磁皿である。口縁は強く外反し、口縁端部は外面は丸くおさまるが、内面は角をもつ。外面は無文であり、内面には型押し成形により牡丹唐草文を浮文とする。釉はごく淡く青みを帯びた白濁色を呈し、高台外側の面取り上端までかかる。高台は断面台形であり、高台脇にはカンナ目が巡っている。高台内は無釉である。割れ口には漆によると思われる補修痕がある。14世紀末～15世紀前半に比定される。

72は白磁碗で、口縁部が玉縁状をなす。11世紀後半～12世紀前半に比定される。

73は越中瀬戸焼の折縁皿である。口縁端部はごくわずかに立ち上がり、体部上方から内面全体に鉄釉が施される。17世紀前半か。

74・75は瓦質土器と思われる鉢で、同一個体と考えられる。醸成焼成された土器であるが、土師器というには硬質で、胎土が精緻であり、焼きむらが顕著であるため瓦質土器とした。74は口縁部片である。器体はほぼ直線的に立ち上がり、端部でわずかに屈曲する。屈曲部は内外面とも浅く窪む。調整は摩滅のため不明であるが、おそらくミガキ調整であろう。75は底部で、器体は底部からほぼ直線的に立ち上がる。底面を含め全面にミガキ調整が施される。74、75共に胎土に海綿骨針を含む。

76は疊岩製の鉢である。内面は被熱が著しく、何らかの生産用具として使用されたと考えられる。

77は漆器碗である。土圧のため楕円形に歪むが、口縁周の長さから口径は約13cmに復元できる。全面に黒色漆が施され、外面には赤色漆による肩文が対向する位置に一对描かれ、見込みにも赤色漆で肩文が描かれる。縁付きは使用のためか黒色漆が剥げている。B I類に属し、16世紀に比定される。

78は杭である。両側から先端を削りV字状を呈する。先端側の一部に樹皮が残る。

#### P23 (第16図、図版12)

79は伊万里焼の碗である。外面には草花文が描かれる。17世紀後半に比定される。

80は凝灰岩製の火鉢と考えられる。上面形・側面形共に長方形を呈すと考えられ、底には隅丸・角柱状の支脚を造り出す。明瞭な被熱痕は認められないが、内面口縁部付近に薄墨色を呈する箇所がある。煤が付着した結果か。

#### P39 (第16図、図版12)

81は非クロコ成形の土器皿である。底部から体部にかけてやや丸みを帯びて立ち上がる。底部は丸底を呈する。内外面全体に薄く溶解物が付着し、胎芯は黒く変色する。埴燒として使用されたものか。17世紀前半に比定される。

82は唐津焼の水差である。外面全体に黒褐色の鉄釉を掛けたのち薺灰釉を掛け流した、いわゆる朝鮮唐津と呼ばれるものである。肩部にはわずかに凸部をもつ。

## 検出時出土遺物（第16・17図、図版12）

83～90は縄文土器である。83は胴部から直線的に開き、口唇部がわずかに外反する器形を呈す深鉢口縁部片である。無施文の口唇部下に爪形文を施す横位半隆起線文を2条1単位とし、半隆起線文と幅狭の横位無文帯を挟んで上下2段で配置する。また、単位的に垂下半隆起線を配し、無文帯や横位半隆起線文を区切る。中期前葉の新保式に比定される。

84はやや内寄する深鉢口縁部片であり、器面が顯著に摩滅する。口縁と平行する横走沈線を3条配す。沈線施文具は幅の狭い草木茎状工具と考えられ、沈線内に数条の条線が残る。胎土には大粒の砂粒を多量に含む。後期前葉か。

85は粗製の深鉢である。口縁部が頸部から強く外屈し、胴部が頸部からわずかに張る器形を呈す。口縁端部にはキザミを施し、4単位で中央部を押圧し凹部とした突起を配す。外面調整には横位の丁寧なミガキを施す。また外面には部分的に炭化物が付着する。器形等から晩期中葉～後葉の中屋式あるいは下野式に並行するものと考えられる。

86は深鉢頸部片である。渦巻き状と弧状の横位半隆起線文により区画された「J」字状区画文内部には縦位の細沈線を充填する。「J」字状区画文の両側には、半隆起線文による縦位区画文が配され、内部には横位の細沈線を充填する。中期前葉の新崎式に比定される。

87は深鉢胴部上半片であり、3条の横走沈線を配す。地文は縦位縄文RLであり、横走沈線より下方にのみ施す。胎土には微細な砂粒を多く含み、海綿骨針も若干含む。88は深鉢頸部片であり2条1単位の斜行沈線を配す。87・88は同一個体と考えられる。後期前葉の気屋式に比定される。

89は粗製の深鉢である。頸部片であり、頸部で強くくびれ、胴部がやや球状に張る器形を呈す。外面調整には横位のナデを施す。ナデの断面は浅い「U」字状を呈し、条痕状となる。また外面には部分的に炭化物が付着する。器形等から晩期中葉の中屋式に並行するものと考えられる。90は深鉢底部片である。底面には網代痕を残す。二次焼成による赤色化および器面剥離が顯著に認められる。

91は陶胎染付の碗で、18世紀後半に比定される。

92は瀬戸焼の天目茶碗である。削り出し高台であり、体部下方はケズリが顯著ではなく稜をもたない。15世紀前半に比定される。

93は瀬戸系の碗で、高台以外全面に灰釉が施される。17世紀後半から18世紀に比定される。

94は越中瀬戸焼の壺底部片である。底面は露胎であり、外面立ち上がり部から約1.5cmほど内側に輪状に砂が付着する。内面見込み部も立ち上がり部から1.5cmほど内側に輪状に砂が付着する。底面以外には鉄釉が施される。

95は瓦質土器の鉢である。内外面ともナデ調整であり、外面にはスタンプ文(桜花文)が押捺され、内面には接合痕が明瞭に残る。煤の付着は認められない。焼き締めはやや不良で軟質である。16世紀代のものか。

96は越中瀬戸焼の秉燭である。高台を持つ皿部には切り込みを入れた芯立てが載る。皿部と芯立ての外側に鉄釉を施釉する。底部中央には直径5mm、深さ1.1cmの孔を有す。

97は珠洲焼擂鉢の底部片である。卸し目は幅1.8cmの直線文であり、判然としないが一単位17～18条の浅く細密な櫛齒原体により施される。底面はナデにより糸切り痕が消されている。13世紀前半(Ⅱ期)に比定される。

98は産地不明の擂鉢である。卸し目は幅4.7cmで、一単位12条である。内外面には鉄釉が施釉され、高台をもたず、底面には回転糸切り痕をとどめる。肥前陶器とも考えられるが、在地産の可能性もある。18世紀後半以降に比定される。

## IV まとめ

- ・遺跡の中心時期は中世（13世紀・15世紀前半）と近世（18世紀後半）の3時期に分けられ、それ以外の時期の遺物はほとんど存在しない。また、X85～X130にかけては遺構・遺物が希薄であり、遺跡の中心が大きく北側と南側の2箇所に分かれることが看取できる。
- ・中世の遺構は北側と南側の両地区で確認できるが、近世の遺構は北側に集中する。中世のうち、13世紀の遺構は南側に、15世紀前半の遺構は北側に分かれれる。
- ・SB 1は出土遺物がなく、遺構の帰属時期は不明である。SB 2はSD12との切り合いから15世紀以降と考えられる。
- ・SA 1・SA 2・SA 3からは遺物が出土している。SA 2は越前焼の小片が出土したのみで、遺構の帰属時期が判然としない。SA 1は出土遺物から18世紀代、SA 3は17世紀～18世紀と考えられる。
- ・掘立柱建物跡と柵列の主軸方向はSA 2以外は北を指向している。
- ・SK 6からは「尾張型」小皿、SD12からは景德镇白磁皿や青花小碗が出土している。一般的な集落ではあまり出土しない遺物であるため、中世において有力者が周辺に存在していた可能性が高い。
- ・調査区からは散発的に縄文時代中期前葉～晩期の土器が出土した。本調査区では縄文時代に帰属する明確な遺構は確認できなかったが、周辺に存在する可能性がある。

### 参考文献

- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究 NO. 2』
- 大橋康二 1989 「肥前陶磁」 ニュー・サイエンス社
- 小野正敏 1982 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究 NO. 2』
- 亀井明徳 1980 「日本出土の明代青磁碗の変遷」『鏡山猛先生古希記念 古文化論叢』
- 亀井明徳 1981 「14・15世紀の貿易陶磁一とくに日本出土の中国陶磁」『貿易陶磁研究』NO. 1
- 九州近世陶磁学会 2000 「九州陶磁の編年」九州近世陶磁学会
- 九州近世陶磁学会 2001 「国内出土の肥前陶磁 東日本の流通をさぐる」九州近世陶磁学会
- 九州近世陶磁学会 2002 「国内出土の肥前陶磁 西日本の流通をさぐる」九州近世陶磁学会
- 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 1994 「梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺構編）一東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Iー」
- 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 1996 「梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）一東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告IIー」
- 佐賀県立九州陶磁文化館 2008 「土の美 古唐津一肥前陶器のすべてー」
- 大宰府市教育委員会 2000 「大宰府条坊跡 X V」
- 田中照久 2006 「近世の越前」「江戸時代のやきもの 生産と流通」財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター
- 富山県福光町・医王山文化調査委員会 1993 「医王は語る」
- 富山大学人文学部考古学研究室・石川考古学研究会 1993 「珠洲大畠窯」
- 藤沢良祐 2008 「中世瀬戸窯の研究」高志書院
- 宮田進一 1997 「越中瀬戸の変遷と分布」「中・近世の北陸」北陸中世土器研究会
- 森田勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』NO. 2
- 吉岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」吉岡弘文館

X45  
Y 0

+X45  
Y 6 X105  
Y 0

+X105  
Y 6

X180  
Y 0

+X180  
Y 6

SB1  
SK5  
P7  
P8  
P9  
P11  
P12  
P13  
P15  
P16  
P17  
P18  
P19  
P20  
P21  
P22  
SK4  
SD2  
SK3  
SK1  
P1  
P2

縄文土器  
出土地点2

SD1  
SD6  
P12  
P13  
P15  
P16  
P17  
P18  
P19  
P20  
P21  
P22  
P23  
SD11  
P35  
SE1  
P39  
P68  
SB2  
SK12  
P43  
P44  
P45  
P46  
P47  
P48  
P49  
P50  
P51  
P52  
P53  
P54  
P55  
P56  
P57  
P58  
P66  
SA1  
SA2  
SA3  
P67  
SD14  
SD15  
SK16  
SK15  
SD10  
SD9  
SD7  
SD6  
P17  
P14  
P13  
P12  
P11  
P10  
P9  
P8  
P7  
SD4  
SD5  
SD3  
SD2  
SK1  
SK2  
SK3  
SK4  
SK5  
SK6  
P104  
P9  
P8  
P7  
P6  
P5  
P4  
P3  
P2  
P1  
P0

縄文土器  
出土地点1

X10  
Y 0

+X10  
Y 6 X70  
Y 0

+X70  
Y 6 X130  
Y 0

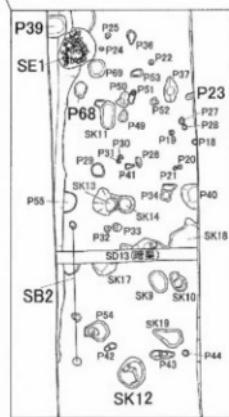
SK21  
SK22  
SK10  
SK11  
SK12  
SK13  
SK14  
SK15  
SK16  
SK17  
SK18  
SK19  
SK20  
SK21  
SK22

+X130  
Y 6

0 1:200 10m  
0 1:400 20m



調査区割図 (S=1:5,000)



拡大図 (S=1:200)

第6図 高畠遺跡4地区 平面図 (S=1:400)

SB1



SB1

P1 ① 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 にぶい黄褐色粘質土を10%含む。  
P2 ① 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 にぶい黄褐色粘質土を10%含む。

P3 ① 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 にぶい黄褐色粘質土を10%含む。  
② 2.5Y3/2 黒褐色粘質土 単一層。しまり強い。

SB2



L=78.60m

SB2

P1 ① 2.5Y3/2 黒褐色粘質土 黄褐色粘質土を40%含む。  
P2 ① 2.5Y3/2 黑褐色粘質土 微量含む。  
② 2.5Y3/2 黑褐色粘質土 単一層。  
③ 2.5Y3/2 黑褐色粘質土 硫化物を微量含む。

P3 ① 2.5Y3/2 黑褐色粘質土 黄褐色粘質土を40%含む。  
P4 ① 2.5Y3/2 黑褐色粘質土 黄褐色粘質土を10%含む。  
② 2.5Y3/2 黑褐色粘質土 黑褐色粘質土を10%含む。

にぶい黄色粘質土を20%含む。

SA1



L=78.60m



SA1

P1 ① 7.5Y6/2 灰オリーブ色粘質土 オリーブ黒色粘質土を10%含む。

P4 ① 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 緑灰色粘質土を20%含む。

P2 ① 5Y2/2 オリーブ黒色粘質土 緑灰色粘質土を10%含む。

② 7.5Y4/1 灰色粘質土 緑灰色粘質土を10%含む。

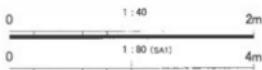
P3 ① 5Y2/2 オリーブ黒色粘質土 緑灰色粘質土を微量含む。

② 7.5Y4/1 灰色粘質土 緑灰色粘質土を30%含む。

③ 7.5Y6/2 灰オリーブ色粘質土 黑褐色粘質土を10%含む。

P5 ① 7.5Y2/1 黑色粘質土 緑灰色粘質土を10%含む。

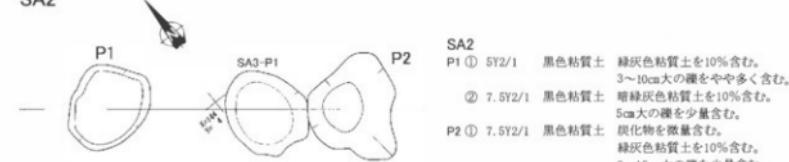
② 5Y2/1 黑色粘質土 2cmの大の礫を微量含む。



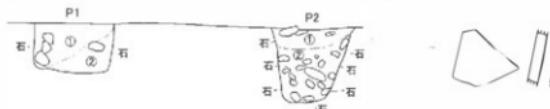
第7図 高畠遺跡4地区の遺構(1)

(S=1:40・S=1:80)

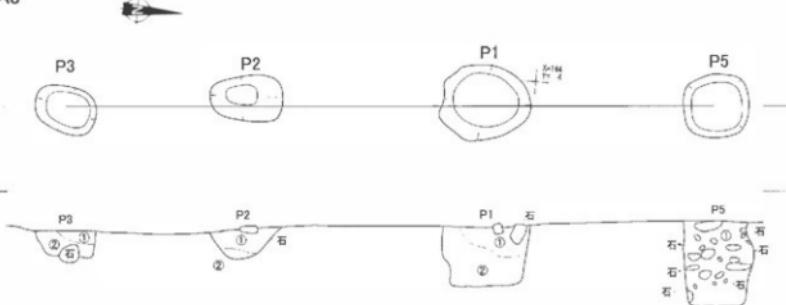
## SA2



L=78.60m



## SA3

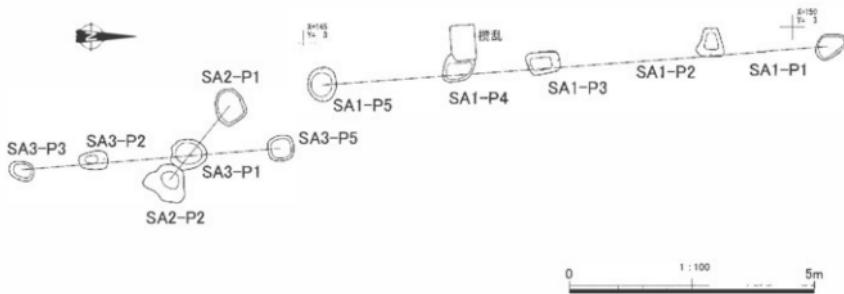


L=78.60m

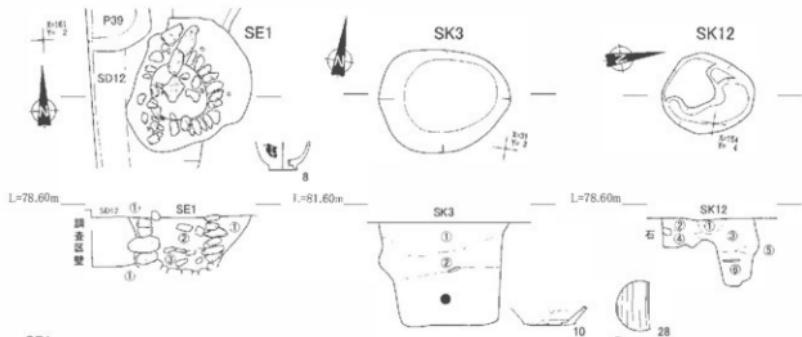
|                     |                                |                        |                              |
|---------------------|--------------------------------|------------------------|------------------------------|
| P1 ① 7.5Y2/1 黒色粘質土  | 緑灰色粘質土を10%含む。<br>5~10cm大の礫を含む。 | P3 ① 5Y2/1 黒色粘質土       | 緑灰色粘質土を少量含む。<br>黒色粘質土を40%含む。 |
| ② 5Y2/1 黒色粘質土       | 暗緑色粘質土をわずかに含む。                 | ② 7.5Y3/2 オリーブ黑色粘質土    | 灰オリーブ粘質土を20%含む。              |
| P2 ① 7.5Y2/1 黒色粘質土  | 2cm大の礫を微量含む。<br>緑灰色粘質土を少量含む。   | P5 ① 7.5Y3/2 オリーブ黑色粘質土 | 2~20cm大の礫を多量含む。              |
| ② 7.5Y3/2 オリーブ黑色粘質土 | 黒色粘質土を微量含む。                    |                        |                              |

0 1:40 2m

## 柵列配置図



第8図 高畠遺跡4地区の遺構(2) (S=1:40・S=1:100)



### SE1

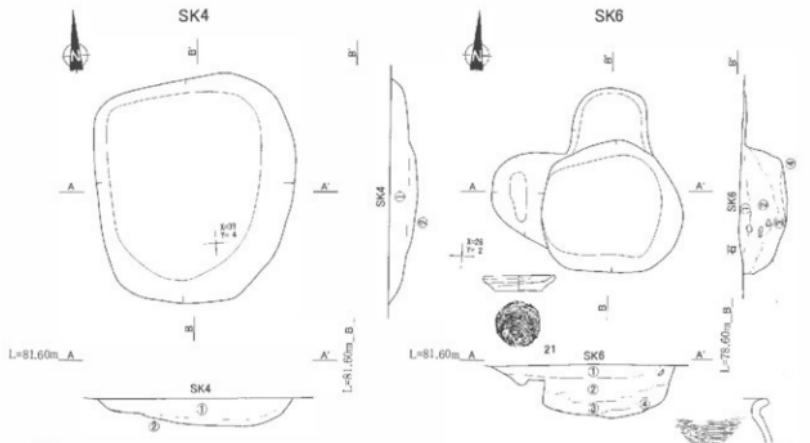
- ① 7.Y3/1 オリーブ黒色粘質土 黒褐色粘質土ブロックを10%含む。明黄褐色粘質土ブロックを20%含む。裏込め土。  
 ② 5Y2/1 黒色砂質土 5mm~1cm大の礫を多く含む。30cm大の礫を含む。(井戸の崩落石と考えられる。)  
 ③ 5G4/1 鮮青灰色粘質土 黒色粘質土ブロックを微量含む。明黄褐色粘質土ブロックを微量含む。  
 20cm大の礫を含む。(井戸の崩落石と考えられる。)

### SK3

- ① 10Y2/2 黒褐色粘質土 樹化物を微量含む。黒褐色粘質土を30%含む。  
 ② 2.5Y3/2 黑褐色粘質土 黒色粘質土を20%含む。3cm大の礫を微量含む。  
 ③ 2.5Y2/1 黑色粘質土 明黄褐色粘質土を10%含む。

### SK12

- ① 5Y2/1 黑色粘質土 黄褐色粘質土を10%含む。  
 ② 5Y2/1 黑色粘質土 暗緑灰色粘質土を20%含む。  
 ③ 5Y2/1 黑色粘質土 樹化物を含む。  
 ④ 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 暗緑灰色粘質土を微量含む。  
 ⑤ 7.5Y2/1 黑色粘質土 暗緑灰色粘質土を20%含む。  
 ⑥ 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 単一層。



### SK4

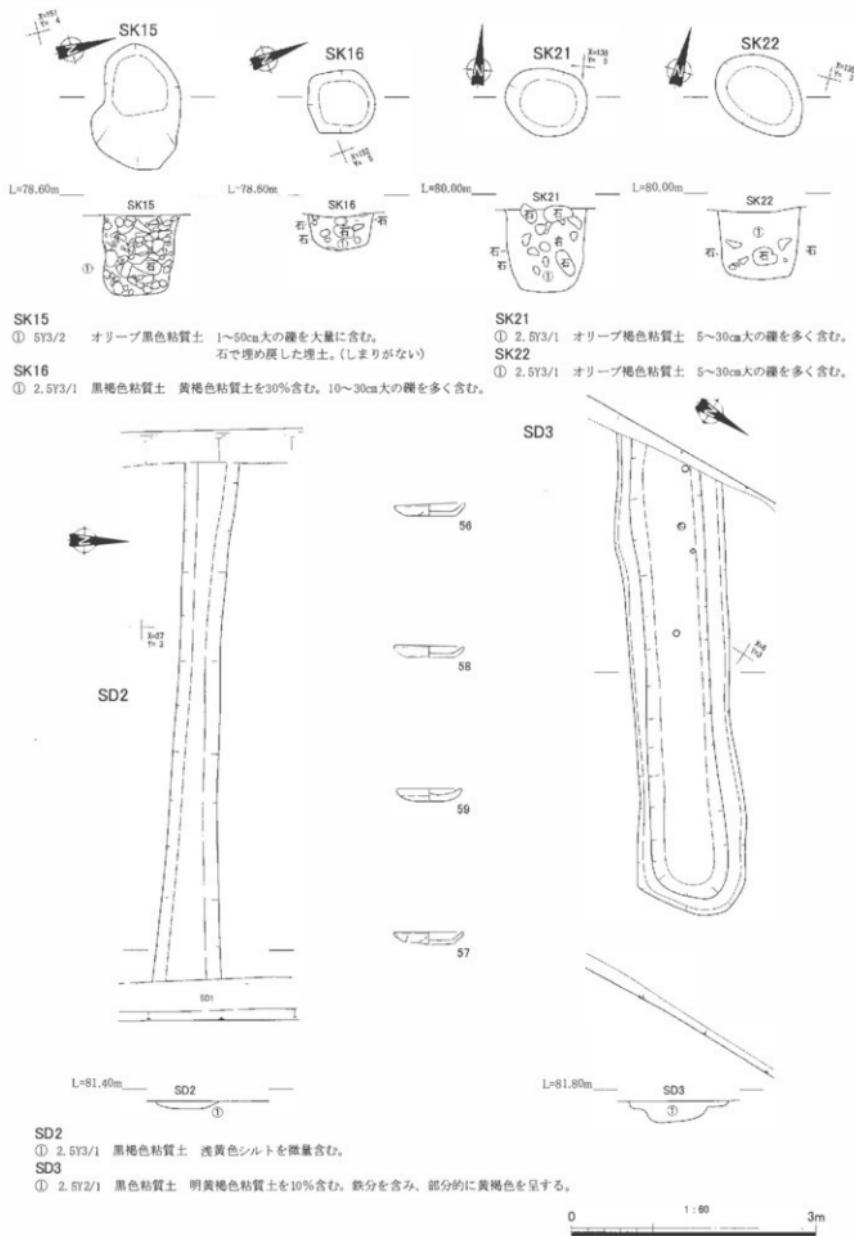
- ① 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土 樹化物を微量含む。黄褐色粘質土を10%含む。  
 ② 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘質土 樹化物を微量含む。30%程度まだらに鉄分を含み、黄褐色を呈する。地山よりもわざかに色調が暗い。

### SK6

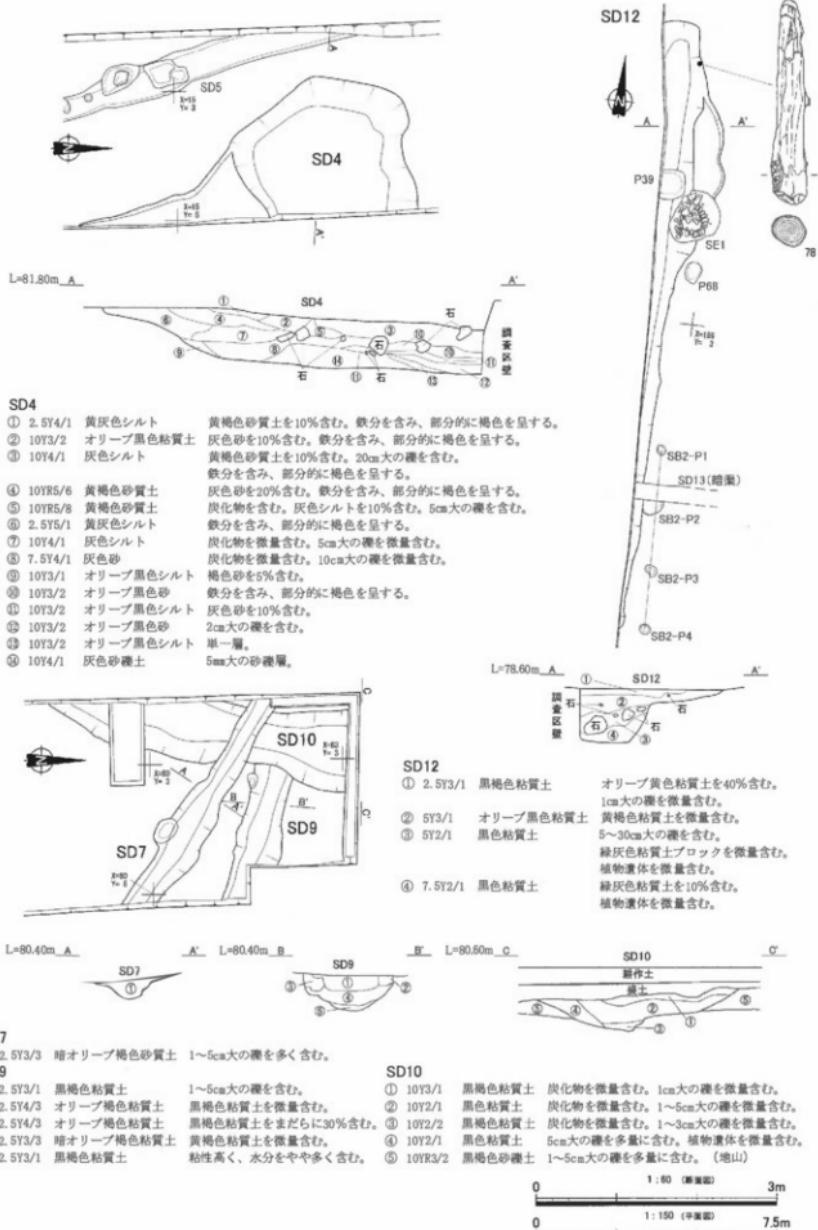
- ① 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト 黒褐色シルトを10%含む。にぶい黄色シルトを10%含む。  
 ② 2.5Y3/2 黑褐色粘質土 にぶい黄色シルトを10%含む。樹化物を多く含む。  
 ③ 2.5Y3/1 黑褐色粘質土 にぶい黄色シルトを20%含む。鉄分を含み、部分的に褐色を呈する。  
 ④ 2.5Y2/1 黑褐色粘質土 にぶい黄色シルトを20%含む。

0 1:60 3m

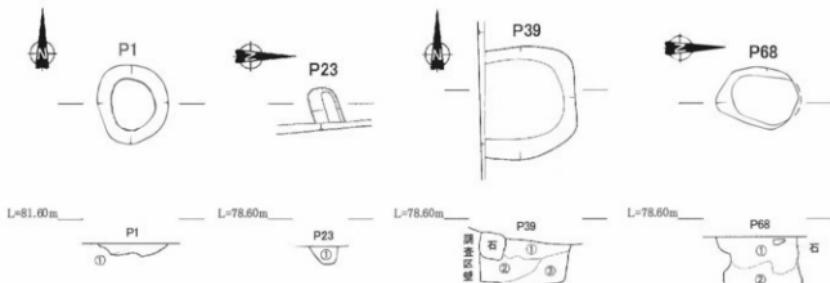
第9図 高畠遺跡4地区の遺構(3) (S=1:60)



第10図 高畠遺跡4地区の遺構(4) (S=1:60)



第11図 高富遺跡4地区の遺構(5) (S=1:60・S=1:150)



P1

- ① 2.5Y3/2 黒褐色粘質土 淡黄色粘質土をわずかに含む。
- P39
- ① 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 黄褐色粘質土を10%含む。
- ② SY3/1 オリーブ黒色粘質土 黑色粘質土を30%含む。
- ③ SY3/1 オリーブ黒色粘質土 黄褐色粘質土を10%含む。

P23

- ① 5Y2/2 オリーブ黒色粘質土 増緑灰色粘質土を30%含む。
- 黄褐色粘質土を微量含む。

P68

- ① 5Y2/1 黒色粘質土 炭化物を微量含む。
- 灰色粘質土ブロックを5%含む。
- 鉄分を含み、部分的に黄褐色を呈する。
- 鉄分を含み、部分的に黄褐色を呈する。

P7

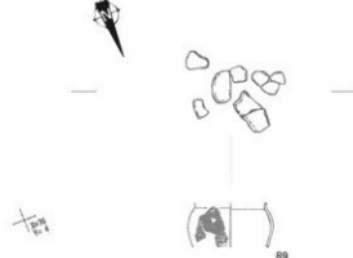
- ② 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 鉄分を含み、部分的に褐色を呈する。
- ② 2.5Y4/2 オリーブ褐色粘質土 黑褐色粘質土を10%含む。

P8

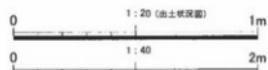
- ① 2.5Y3/3 増オリーブ褐色粘質土 炭化物をわずかに含む。
- ① 2.5Y4/2 増灰黄色粘質土 鉄分を含み、部分的に明褐色を呈する。

### 縄文土器出土状況図

出土状況地点(X76、Y4)

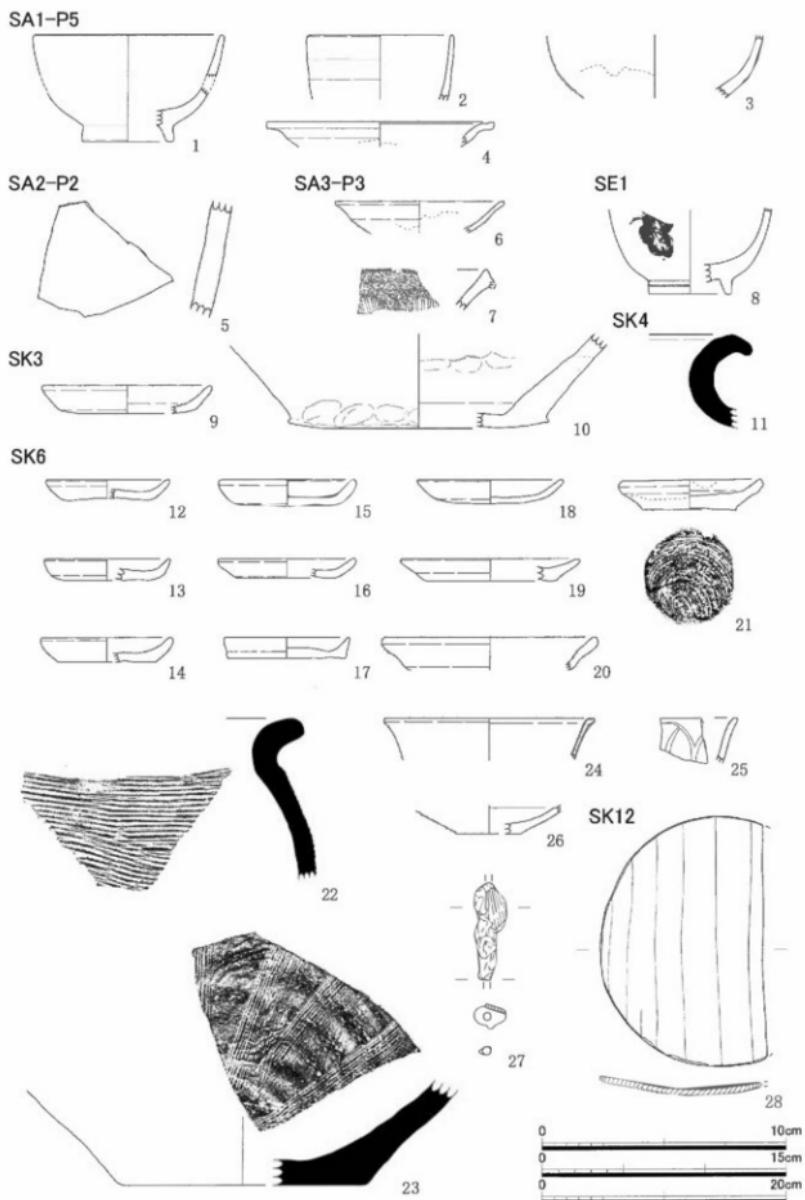


出土状況地点(X102、Y4)

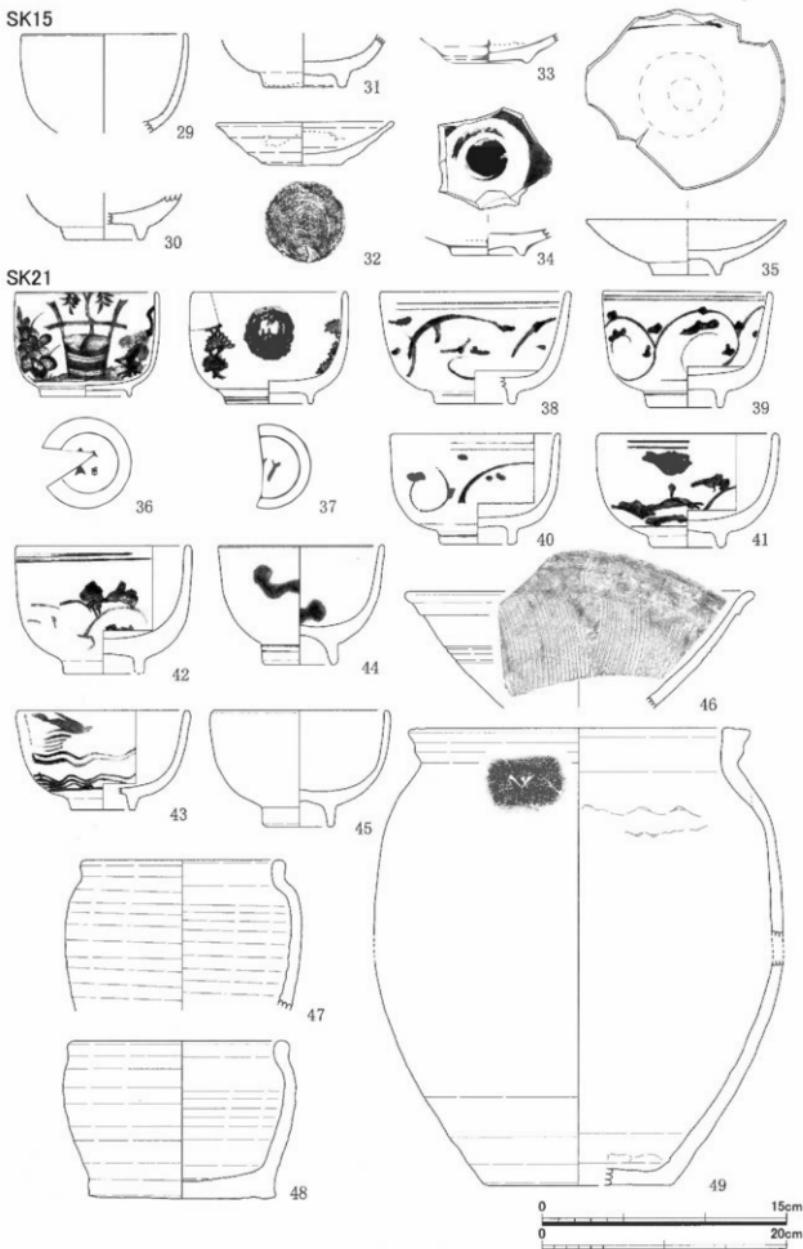


第12図 高畠遺跡4地区の遺構(6)

(S=1:20・S=1:40)

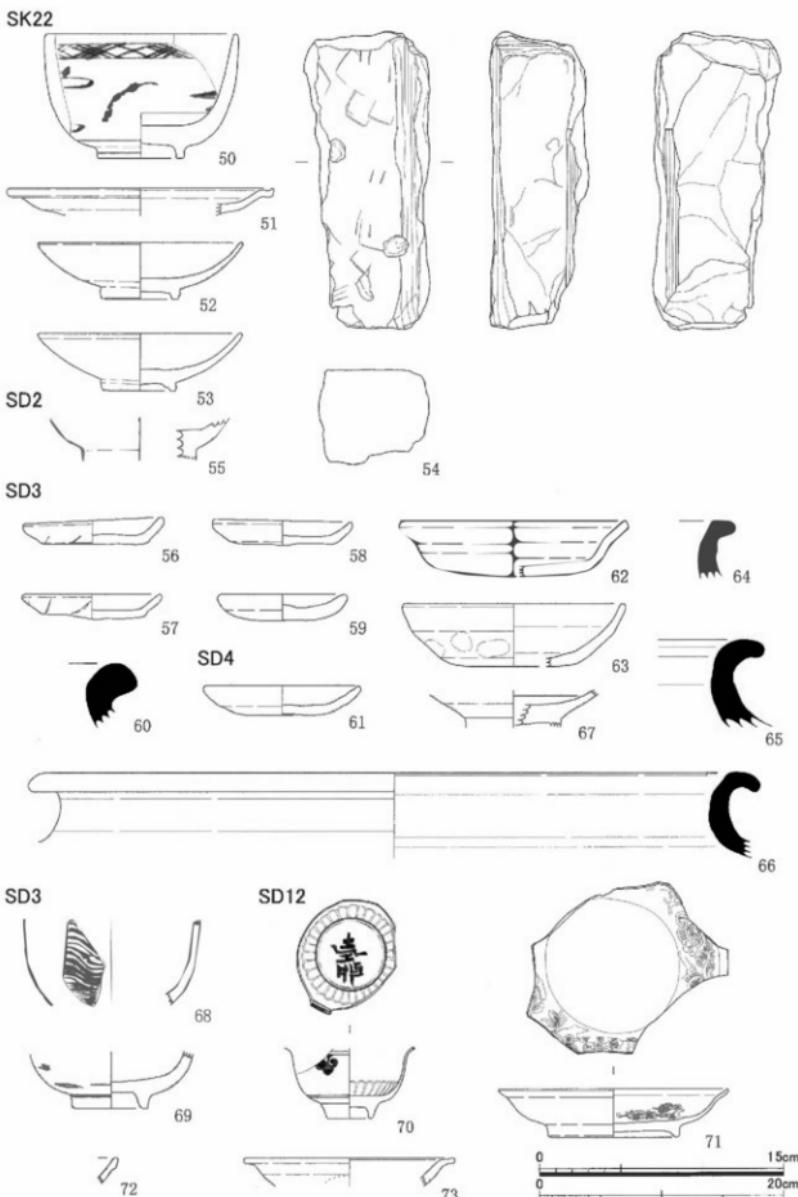


第13図 高富遺跡4地区の遺物 (1) 10・28(S=1:4) 27(S=1:2) 他(S=1:3)



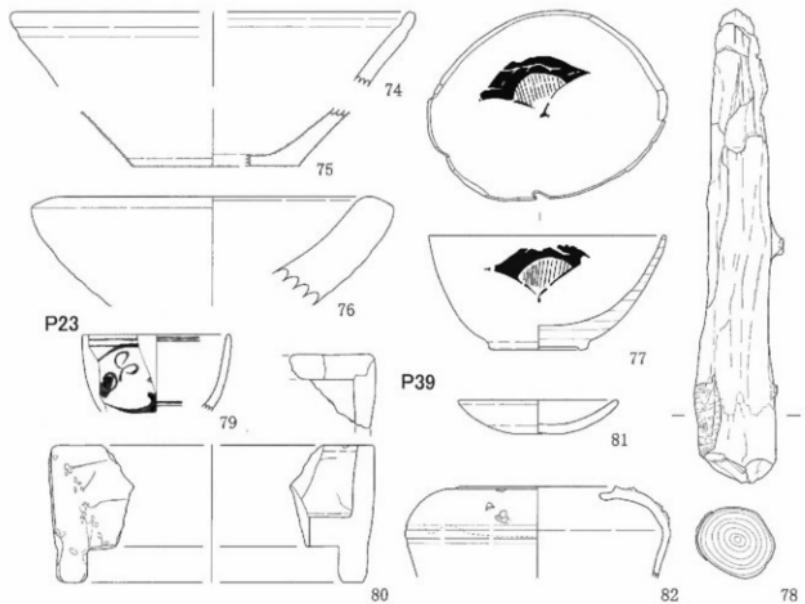
第14図 高畠遺跡4地区の遺物(2)

46·49(S=1:4) 他(S=1:3)

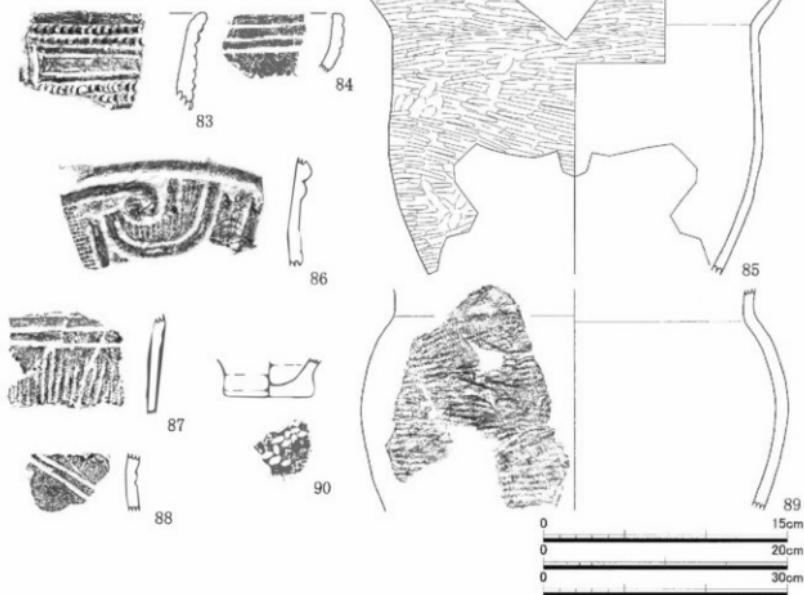


第15図 高昌遺跡4地区の遺物(3)

54 · 66(S=1:4) 他(S=1:3)

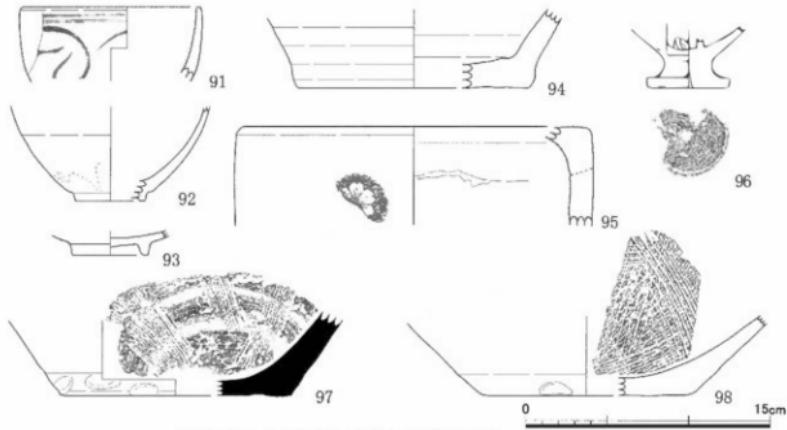


検出時出土遺物



第16図 高畠遺跡4地区の遺物(4)

78(S=1:6) 74・75・76・89(S=1:4) 他(S=1:3)



第17図 高畠遺跡4地区の遺物(5)

(S=1:3)

第3表 出土遺物観察表  
遺構出土遺物(碗、皿、甕、鉢等)

| 図版番号 | 遺物番号 | 遺構名    | 種類    | 器種 | 口径(cm) | 底径(cm) | 器高(cm) | 備考             |
|------|------|--------|-------|----|--------|--------|--------|----------------|
| 13   | 1    | SA1-P5 | 唐津焼   | 碗  | 11.8   | 5.6    | (6.5)  | 舟器手            |
| 13   | 2    | SA1-P5 | 唐津焼   | 碗  | 8.9    | -      | (3.9)  |                |
| 13   | 3    | SA1-P5 | 唐津焼   | 碗  | -      | -      | (3.8)  |                |
| 13   | 4    | SA1-P5 | 越中瀬戸焼 | 皿  | 14.0   | -      | (1.5)  | 折縁皿            |
| 13   | 5    | SA2-P2 | 越前焼   | 甕  | -      | -      | -      |                |
| 13   | 6    | SA3-P3 | 越中瀬戸焼 | 皿  | 10.4   | -      | (1.9)  |                |
| 13   | 7    | SA3-P3 | 越中瀬戸焼 | 擂鉢 | -      | -      | (2.8)  |                |
| 13   | 8    | SE1    | 伊万里焼  | 碗  | -      | 5.0    | (5.3)  |                |
| 13   | 9    | SK3    | 土師器   | 皿  | 10.4   | 6.0    | 1.7    |                |
| 13   | 10   | SK3    | 越前焼   | 甕  | -      | 20.8   | (7.5)  |                |
| 13   | 11   | SK4    | 珠洲焼   | 甕  | -      | -      | (5.7)  |                |
| 13   | 12   | SK6    | 土師器   | 皿  | 7.6    | 5.5    | 1.2    |                |
| 13   | 13   | SK6    | 土師器   | 皿  | 7.7    | 5.5    | 1.3    |                |
| 13   | 14   | SK6    | 土師器   | 皿  | 8.1    | 6.0    | 1.5    |                |
| 13   | 15   | SK6    | 土師器   | 皿  | 8.5    | 6.1    | 1.7    |                |
| 13   | 16   | SK6    | 土師器   | 皿  | 8.4    | 6.0    | 1.2    |                |
| 13   | 17   | SK6    | 土師器   | 皿  | 7.8    | 7.1    | 1.2    |                |
| 13   | 18   | SK6    | 土師器   | 皿  | 9.0    | 4.0    | 1.5    |                |
| 13   | 19   | SK6    | 土師器   | 皿  | 11.0   | 7.8    | 1.4    |                |
| 13   | 20   | SK6    | 土師器   | 皿  | 13.3   | -      | (2.0)  |                |
| 13   | 21   | SK6    | 瀬戸焼   | 皿  | 8.5    | 5.7    | 1.8    |                |
| 13   | 22   | SK6    | 珠洲焼   | 甕  | -      | -      | (9.9)  |                |
| 13   | 23   | SK6    | 珠洲焼   | 擂鉢 | -      | 14.4   | (6.2)  |                |
| 13   | 24   | SK6    | 青磁    | 壺  | 13.0   | -      | (2.5)  | 大宰府分類III-1類    |
| 13   | 25   | SK6    | 青磁    | 碗  | -      | -      | (2.8)  | 大宰府分類II-b×c×d類 |
| 13   | 26   | SK6    | 白磁    | 皿  | -      | 4.0    | (1.7)  | 大宰府分類V×VI類     |

| 国版<br>番号 | 遺物<br>番号 | 遺構名  | 種類    | 器種  | 口径<br>(cm) | 底径<br>(cm) | 器高<br>(cm) | 備考              |
|----------|----------|------|-------|-----|------------|------------|------------|-----------------|
| 14       | 29       | SK15 | 唐津焼   | 碗   | 10.2       | —          | (6.0)      | 呉器手             |
| 14       | 30       | SK15 | 唐津焼か  | 碗   | —          | 4.8        | (2.8)      |                 |
| 14       | 31       | SK15 | 陶胎染付  | 碗   | —          | 6.1        | (3.2)      |                 |
| 14       | 32       | SK15 | 越中瀬戸焼 | 皿   | 10.9       | 4.8        | 2.6        |                 |
| 14       | 33       | SK15 | 越中瀬戸焼 | 皿   | —          | 5.0        | (1.5)      |                 |
| 14       | 34       | SK15 | 唐津焼   | 皿   | —          | 4.5        | (1.6)      | 青緑釉蛇の目釉剥ぎ       |
| 14       | 35       | SK21 | 伊万里焼  | 皿   | 12.3       | 4.2        | 3.4        |                 |
| 14       | 36       | SK21 | 伊万里焼  | 碗   | 8.8        | 5.6        | 6.3        |                 |
| 14       | 37       | SK21 | 伊万里焼  | 碗   | 9.7        | 5.4        | 6.8        |                 |
| 14       | 38       | SK21 | 陶胎染付  | 碗   | 11.6       | 4.9        | (6.8)      |                 |
| 14       | 39       | SK21 | 陶胎染付  | 碗   | 10.4       | 4.7        | 7.1        |                 |
| 14       | 40       | SK21 | 陶胎染付  | 碗   | 10.5       | 4.8        | 6.8        |                 |
| 14       | 41       | SK21 | 陶胎染付  | 碗   | 10.8       | 4.6        | 7.0        |                 |
| 14       | 42       | SK21 | 陶胎染付  | 碗   | 10.5       | 5.0        | 7.9        |                 |
| 14       | 43       | SK21 | 唐津焼   | 碗   | 10.4       | 4.0        | 6.1        |                 |
| 14       | 44       | SK21 | 唐津焼   | 碗   | 10.2       | 4.7        | 7.3        | 呉器手             |
| 14       | 45       | SK21 | 唐津焼   | 碗   | 11.1       | 4.5        | 7.2        | 呉器手             |
| 14       | 46       | SK21 | 庵地不明  | 擂鉢  | 27.8       | —          | (9.3)      |                 |
| 14       | 47       | SK21 | 越中瀬戸焼 | 広口壺 | 11.8       | —          | (9.1)      |                 |
| 14       | 48       | SK21 | 越中瀬戸焼 | 広口壺 | 12.2       | 11.4       | 9.7        |                 |
| 14       | 49       | SK21 | 越前焼   | 甕   | 28.0       | 15.0       | (37.5)     |                 |
| 15       | 50       | SK22 | 陶胎染付  | 碗   | 11.8       | 5.1        | 7.6        |                 |
| 15       | 51       | SK22 | 越中瀬戸焼 | 皿   | 16.4       | —          | 1.6        | 折縁皿             |
| 15       | 52       | SK22 | 唐津焼   | 皿   | 12.4       | 4.7        | 3.5        | 青緑釉蛇の目釉剥ぎ       |
| 15       | 53       | SK22 | 唐津焼   | 皿   | 12.4       | 4.5        | 3.5        | 青緑釉蛇の目釉剥ぎ       |
| 15       | 55       | SD 2 | 青磁    | 碗   | —          | 7.0        | (2.5)      | 大宰府分類I - 2類     |
| 15       | 56       | SD 3 | 土師器   | 皿   | 8.5        | 6.5        | 1.7        |                 |
| 15       | 57       | SD 3 | 土師器   | 皿   | 8.4        | 6.3        | 1.6        |                 |
| 15       | 58       | SD 3 | 土師器   | 皿   | 8.3        | 5.8        | 1.6        |                 |
| 15       | 59       | SD 3 | 土師器   | 皿   | 7.5        | 3.6        | 1.6        |                 |
| 15       | 60       | SD 3 | 珠洲焼   | 甕   | —          | —          | (3.9)      |                 |
| 15       | 61       | SD 4 | 土師器   | 皿   | 9.4        | 5.4        | 1.8        |                 |
| 15       | 62       | SD 4 | 土師器   | 皿   | 14.0       | 7.0        | 3.4        |                 |
| 15       | 63       | SD 4 | 土師器   | 皿   | 13.7       | 5.8        | 3.8        |                 |
| 15       | 64       | SD 4 | 珠洲焼   | 甕   | —          | —          | (3.5)      |                 |
| 15       | 65       | SD 4 | 珠洲焼   | 甕   | —          | —          | (5.3)      |                 |
| 15       | 66       | SD 4 | 珠洲焼   | 甕   | 60.0       | —          | (7.0)      |                 |
| 15       | 67       | SD 4 | 白磁    | 皿   | —          | —          | (2.3)      | 大宰府分類V類         |
| 15       | 68       | SD 7 | 唐津焼   | 碗   | —          | —          | (4.2)      |                 |
| 15       | 69       | SD 7 | 陶胎染付  | 碗   | —          | 6.1        | (3.5)      |                 |
| 15       | 70       | SD12 | 青花    | 小碗  | —          | 2.9        | (4.5)      | 小野分類B群          |
| 15       | 71       | SD12 | 白磁    | 皿   | 14.1       | 8.0        | 3.0        | 14世紀福建省產との意見もある |
| 15       | 72       | SD12 | 白磁    | 碗   | —          | —          | (1.6)      | 大宰府分類II類        |
| 15       | 73       | SD12 | 越中瀬戸焼 | 皿   | 12.8       | —          | (1.8)      |                 |
| 16       | 74       | SD12 | 瓦質土器か | 鉢   | —          | —          | (6.0)      |                 |
| 16       | 75       | SD12 | 瓦質土器か | 鉢   | —          | —          | (4.7)      |                 |
| 16       | 76       | SD12 | 難岩製   | 鉢   | 25.0       | —          | (8.7)      |                 |
| 16       | 77       | SD12 | 漆器    | 碗   | (13.0)     | 6.1        | 7.0        | 歪み大きい           |
| 16       | 79       | P23  | 伊万里焼  | 碗   | 9.0        | —          | (4.7)      |                 |
| 16       | 80       | P23  | 凝灰岩製  | 火鉢か | —          | —          | (8.4)      |                 |
| 16       | 81       | P39  | 土師器   | 皿   | 9.8        | 3.0        | 2.1        |                 |
| 16       | 82       | P39  | 唐津焼   | 水差  | 19.6       | —          | (5.6)      | 朝鮮唐津            |

※口径・底径の数値には復元値も含まれる。  
※器高は現存値のものは( )で示した。

## 遺構出土遺物（石製品）

| 図版番号 | 遺物番号 | 遺構名  | 種類 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重量(g) | 備考   |
|------|------|------|----|--------|-------|--------|-------|------|
| 15   | 54   | SK22 | 不明 | 24.2   | 10.2  | 7.7    | 2450  | 笏谷石製 |

※法量は最大値で計測した。

## 遺構出土遺物（木製品）

| 図版番号 | 遺物番号 | 遺構名  | 種類  | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 備考 |
|------|------|------|-----|--------|-------|--------|----|
| 13   | 28   | SK12 | 橋底板 | 20.4   | 13.3  | 0.6    |    |
| 16   | 78   | SD12 | 杭   | (58.0) | 10.8  | 8.8    |    |

※法量は最大値で計測した。

## 遺構出土遺物（金属製品）

| 図版番号 | 遺物番号 | 遺構名  | 種類    | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重量(g) | 備考 |
|------|------|------|-------|--------|-------|--------|-------|----|
| 13   | 27   | SK 6 | 不明鉄製品 | 3.9    | 1.3   | 1.1    | 4.3   |    |

※法量は最大値で計測した。

## 検出時出土遺物

| 図版番号 | 遺物番号 | グリッド    | 種類    | 器種   | 口径(cm) | 底径(cm) | 器高(cm) | 備考 |
|------|------|---------|-------|------|--------|--------|--------|----|
| 16   | 83   | X170Y 3 | 縄文土器  | 深鉢   | -      | -      | (5.9)  |    |
| 16   | 84   | X149Y 3 | 縄文土器  | 深鉢   | -      | -      | (3.6)  |    |
| 16   | 85   | X102Y 4 | 縄文土器  | 深鉢   | 26.0   | -      | (18.3) |    |
| 16   | 86   | X176Y 5 | 縄文土器  | 深鉢   | -      | -      | (6.6)  |    |
| 16   | 87   | X149Y 3 | 縄文土器  | 深鉢   | -      | -      | (6.1)  |    |
| 16   | 88   | X149Y 3 | 縄文土器  | 深鉢   | -      | -      | (3.5)  |    |
| 16   | 89   | X76Y 4  | 縄文土器  | 深鉢   | -      | -      | (18.0) |    |
| 16   | 90   | X149Y 3 | 縄文土器  | 深鉢   | -      | -      | (2.4)  |    |
| 17   | 91   | X135Y 3 | 陶胎染付  | 碗    | 11.0   | -      | (4.5)  |    |
| 17   | 92   | X80Y 3  | 瀬戸焼   | 天目茶碗 | -      | 4.2    | (5.8)  |    |
| 17   | 93   | X135Y 3 | 瀬戸系   | 碗    | -      | 4.2    | (1.5)  |    |
| 17   | 94   | X135Y 3 | 越中瀬戸焼 | 壺    | -      | 14.0   | (4.8)  |    |
| 17   | 95   | X135Y 3 | 瓦質土器  | 鉢    | 21.2   | -      | (6.0)  |    |
| 17   | 96   | X78Y 5  | 越中瀬戸焼 | 秉彌   | -      | 5.0    | (3.8)  |    |
| 17   | 97   | X16Y 5  | 珠洲焼   | 擂鉢   | -      | 14.2   | (4.6)  |    |
| 17   | 98   | X135Y 3 | 産地不明  | 擂鉢   | -      | 12.8   | (4.7)  |    |

※口径・底径の数値には復元値も含まれる。

※器高は現存値のものは（ ）で示した。



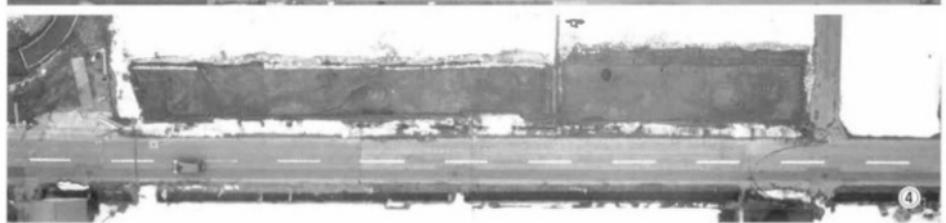
①



②



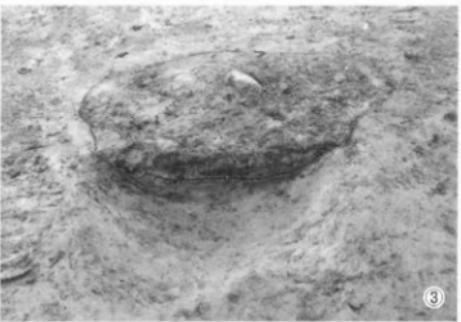
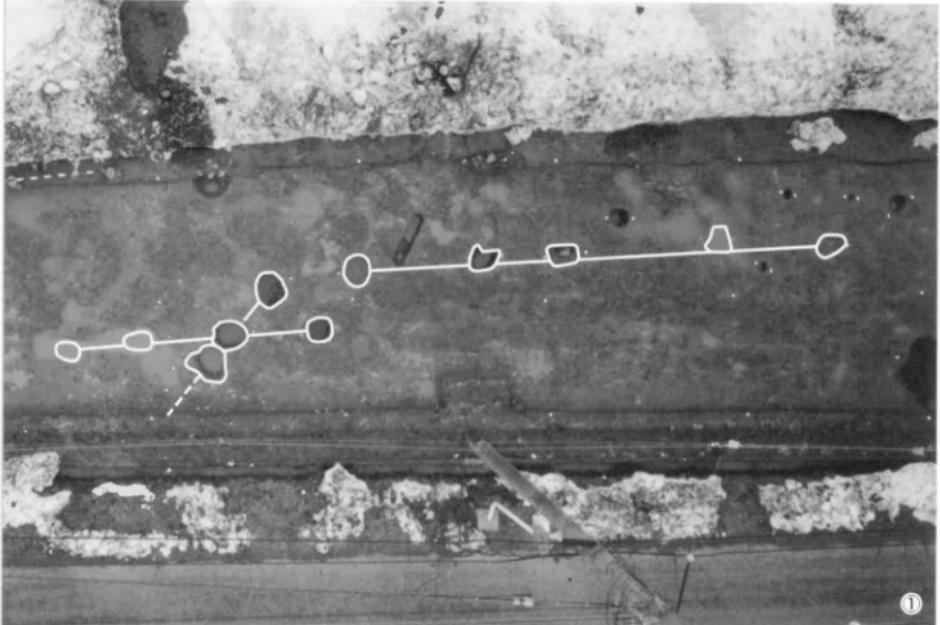
③



④

図版1 高畠遺跡4地区の遺構（1）

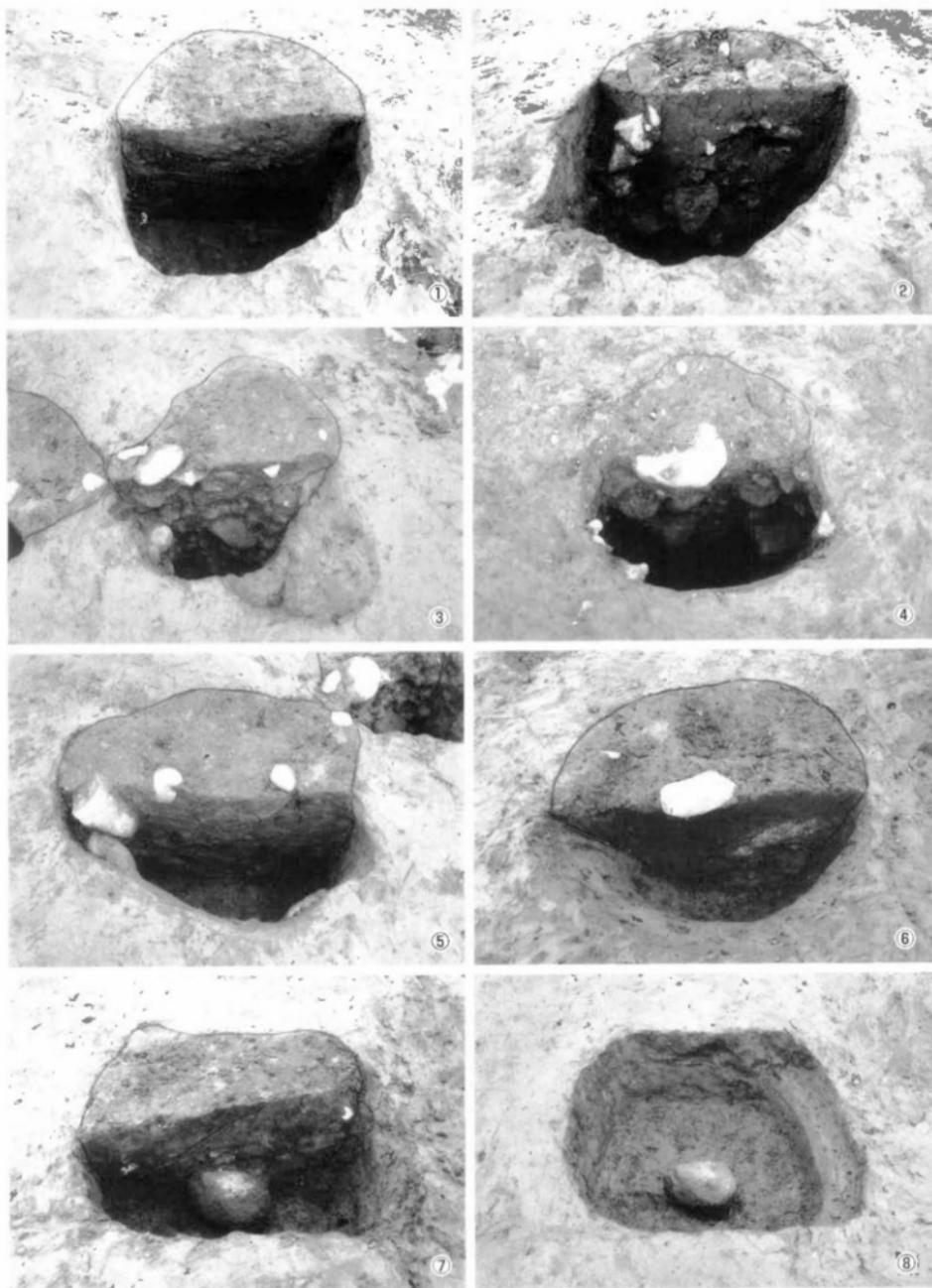
①調査区遠景(北から) ②北側調査区全景(真上から) ③中央調査区全景(真上から) ④南側調査区全景(真上から)



図版2 高富遺跡4地区の遺構(2)

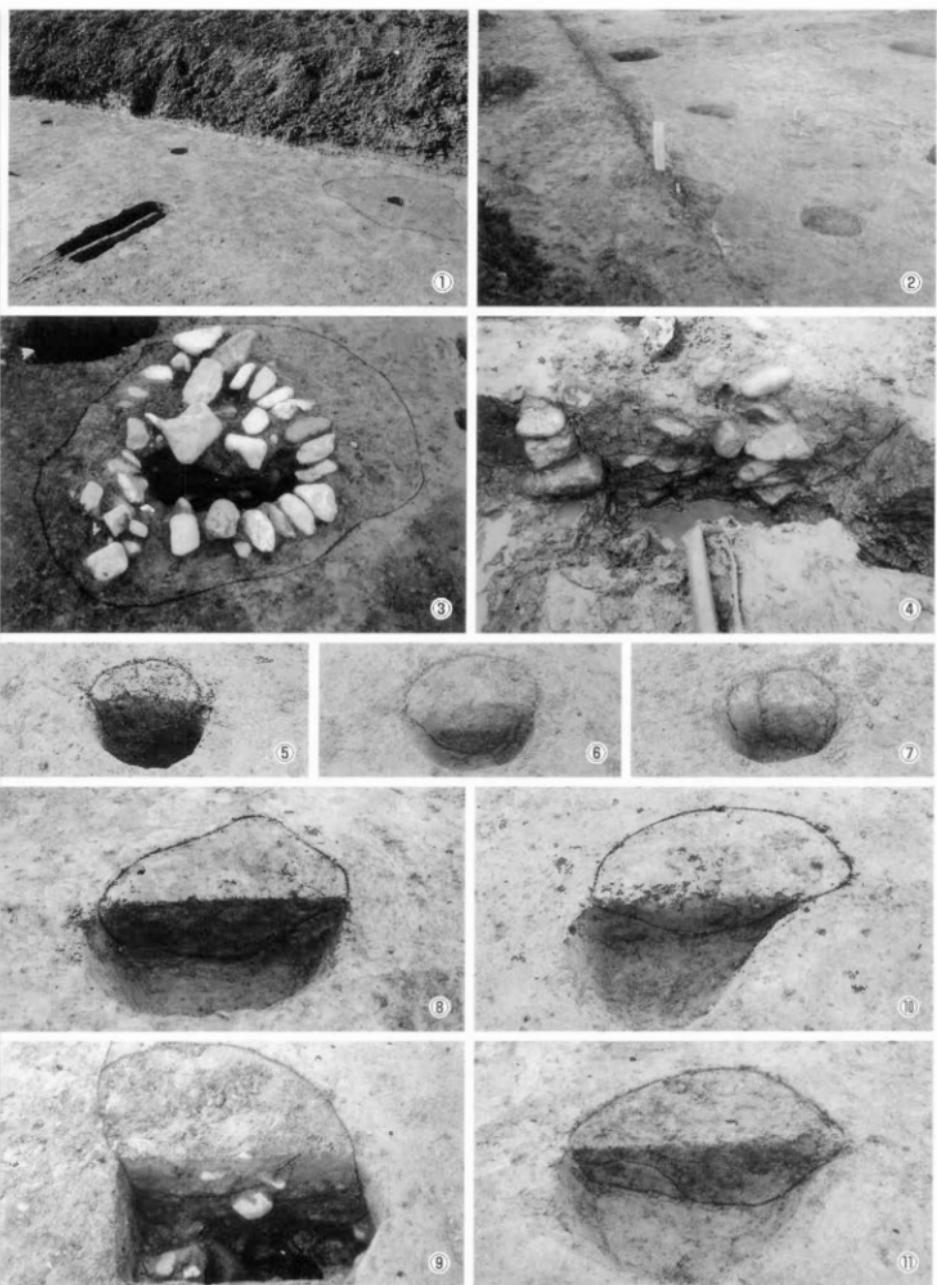
① SA1-SA2-SA3全景(真上から)  
④ SA1-P3(西から)

② SA1-P1(西から)  
⑤ SA1-P4(西から)



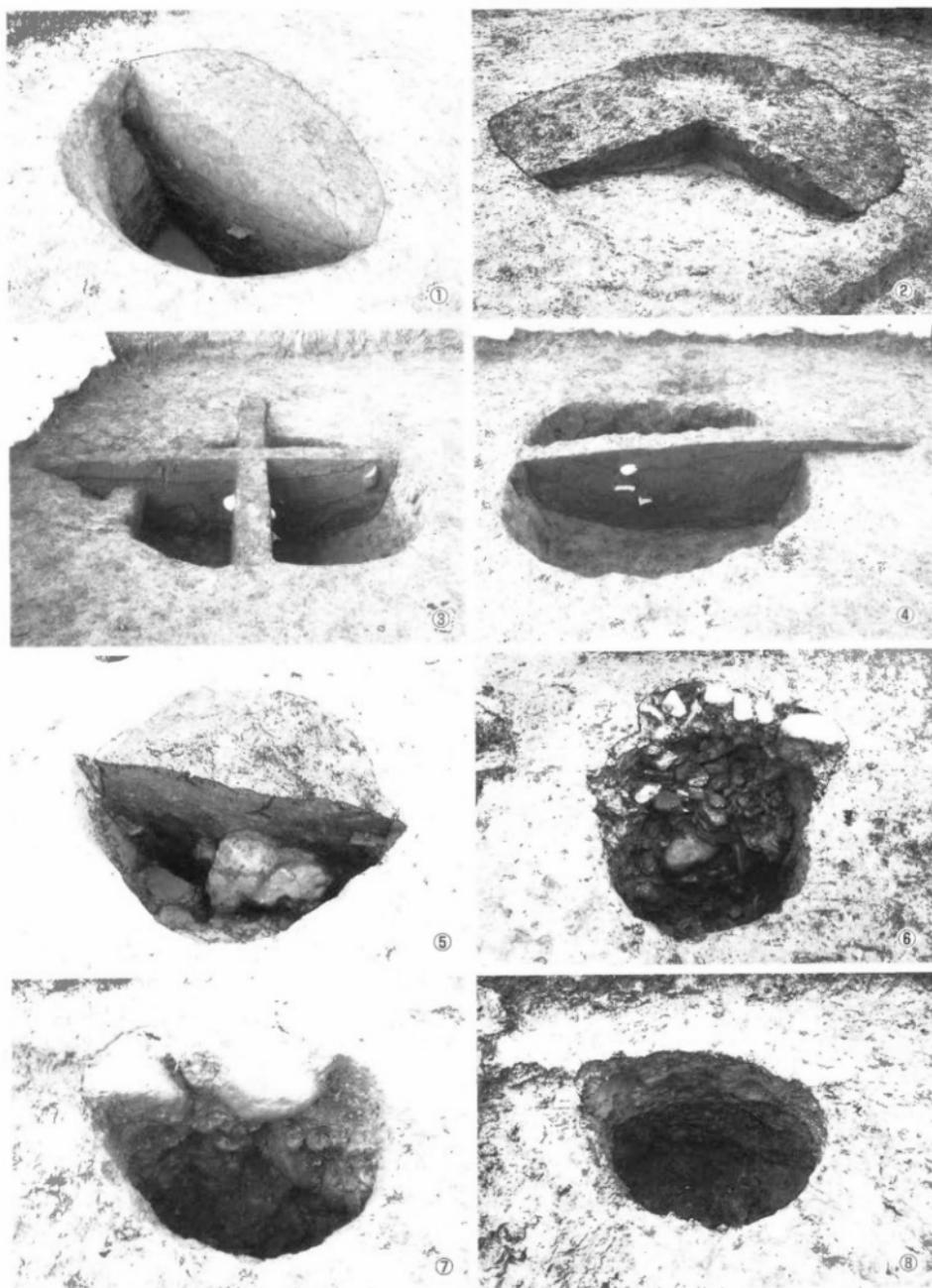
図版 3 高畠遺跡 4 地区の遺構 (3)

- |               |               |                   |                 |
|---------------|---------------|-------------------|-----------------|
| ① SA1-P5(西から) | ② SA2-P1(西から) | ③ SA2-P2(南から)     | ④ SA3-P5(南から)   |
| ⑤ SA3-P1(西から) | ⑥ SA3-P2(西から) | ⑦ SA3-P3土層断面(西から) | ⑧ SA3-P3完掘(西から) |



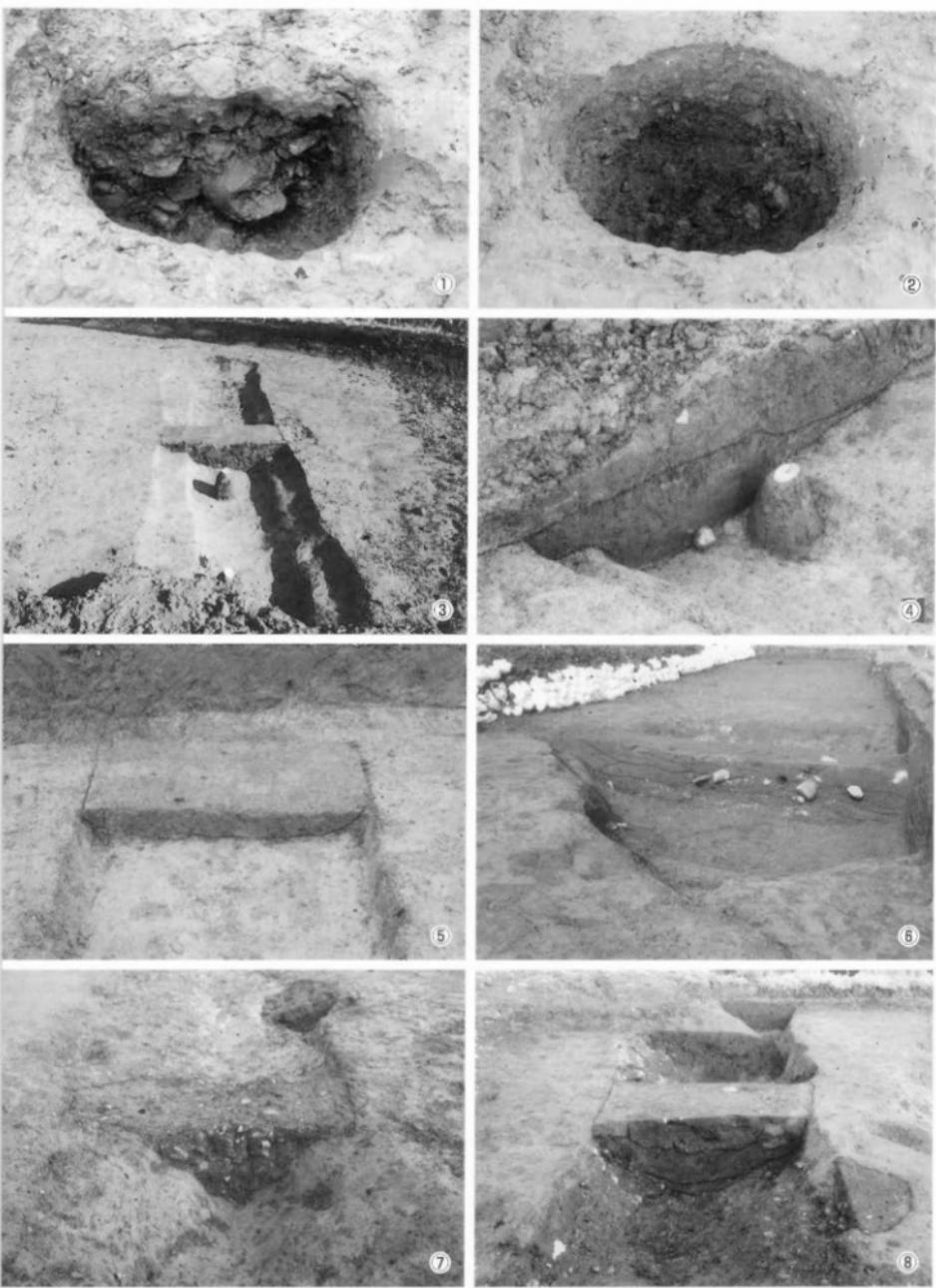
図版 4 高畠遺跡 4 地区の遺構 (4)

- |               |               |               |                |               |
|---------------|---------------|---------------|----------------|---------------|
| ① SB1完掘(東から)  | ② SB2完掘(南から)  | ③ SE1(南から)    | ④ SE1土層断面(南から) | ⑤ SB1-P1(東から) |
| ⑥ SB1-P2(東から) | ⑦ SB1-P3(東から) | ⑧ SB2-P1(西から) | ⑨ SB2-P2(西から)  | ⑩ SB2-P3(西から) |
| ⑪ SB2-P4(西から) |               |               |                |               |



図版5 高窟遺跡4地区の遺構(5)

- |             |             |                  |                  |
|-------------|-------------|------------------|------------------|
| ① SK3(東から)  | ② SK4(西から)  | ③ SK6東西土層断面(南から) | ④ SK6南北土層断面(東から) |
| ⑤ SK12(西から) | ⑥ SK15(西から) | ⑦ SK21土層断面(南から)  | ⑧ SK21穴掘(南から)    |



図版6 高富遺跡4地区の遺構(6)

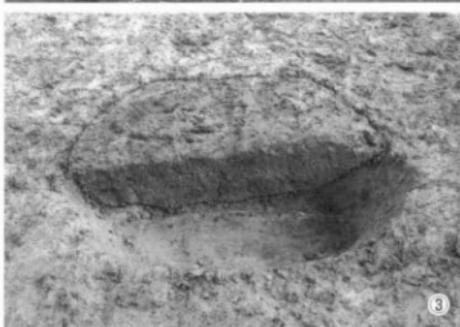
- ① SK22土層断面(南から)
- ② SK22発掘(南から)
- ③ SD3遺物(57-58-59)出土状況(西から)
- ④ SD3遺物(56)出土状況(南から)
- ⑤ SD2(西から)
- ⑥ SD4(南から)
- ⑦ SD7(西から)
- ⑧ SD9(西から)



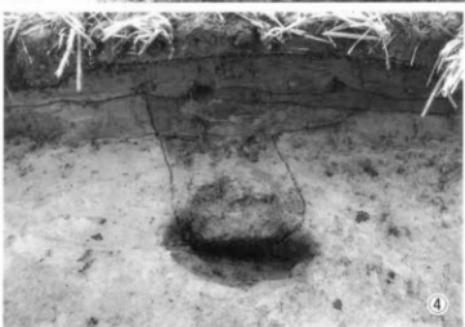
①



②



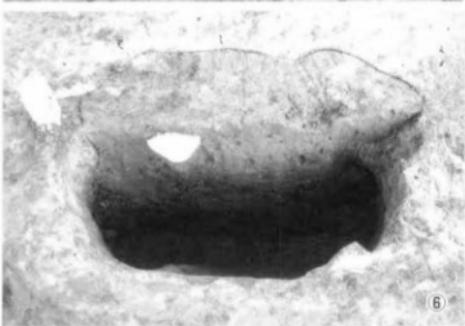
③



④



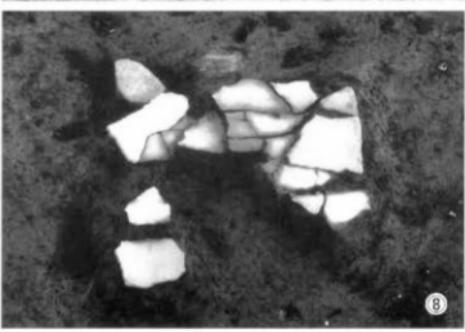
⑤



⑥



⑦

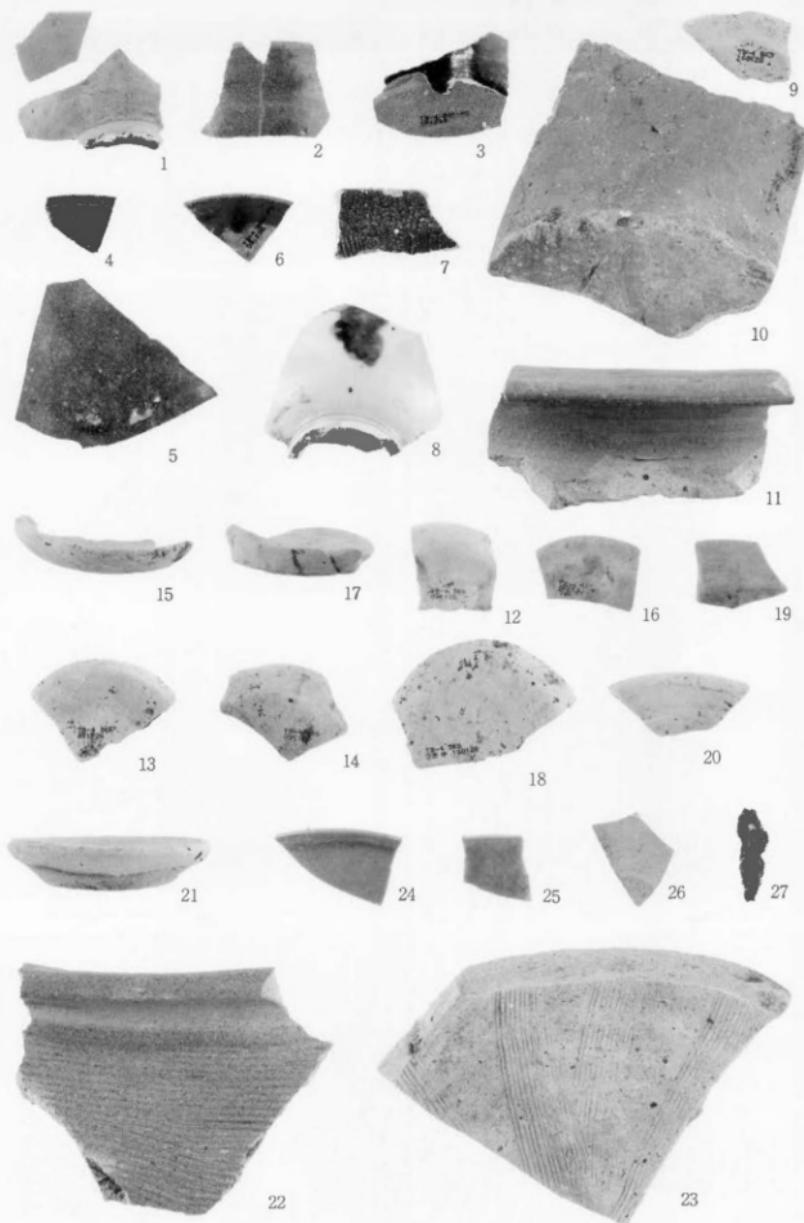


⑧

図版7 高畠遺跡4地区の遺構(7)

① SD10(南から) ② SD12(北から)  
⑤ P39(南から) ⑥ P68(西から)

③ P9(西から) ④ P23(西から)  
⑦ X76、Y4出土状況(北から) ⑧ X102、Y4出土状況(東から)



図版8 高畠遺跡4地区の遺物(1) (S=1:2)

1~4(SA1-P5)

5(SA2-P2)

6~7(SA3-P3)

8(SE1)

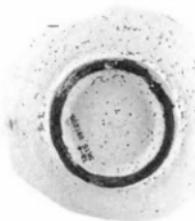
9~10(SK3)

11(SK4)

12~27(SK6)



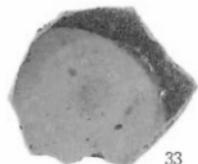
29



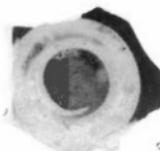
31



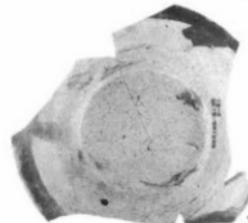
30



33



34



32



36



37



41



38



39



42



40



44



45



43



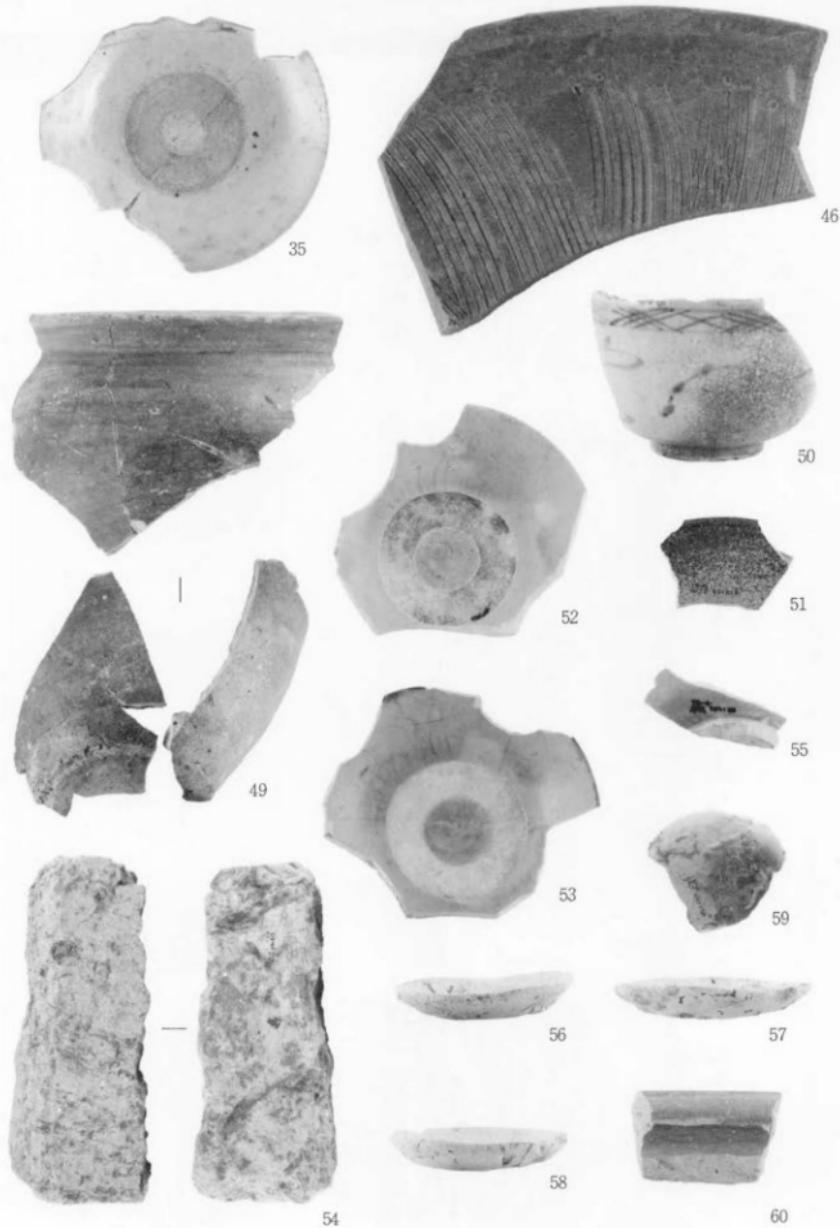
47



48

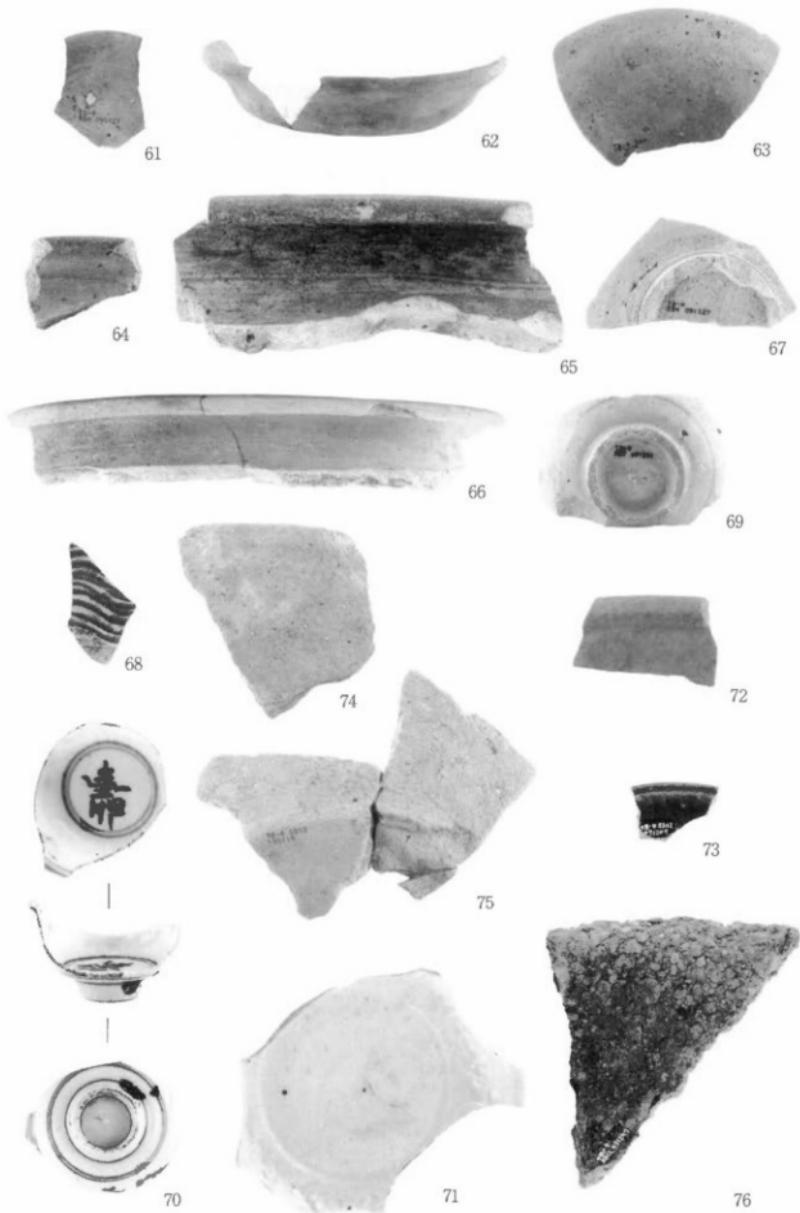
図版9 高畠遺跡4地区の遺物(2) (S=1:2)

29~34(SK15) 36~45・47・48(SK21)



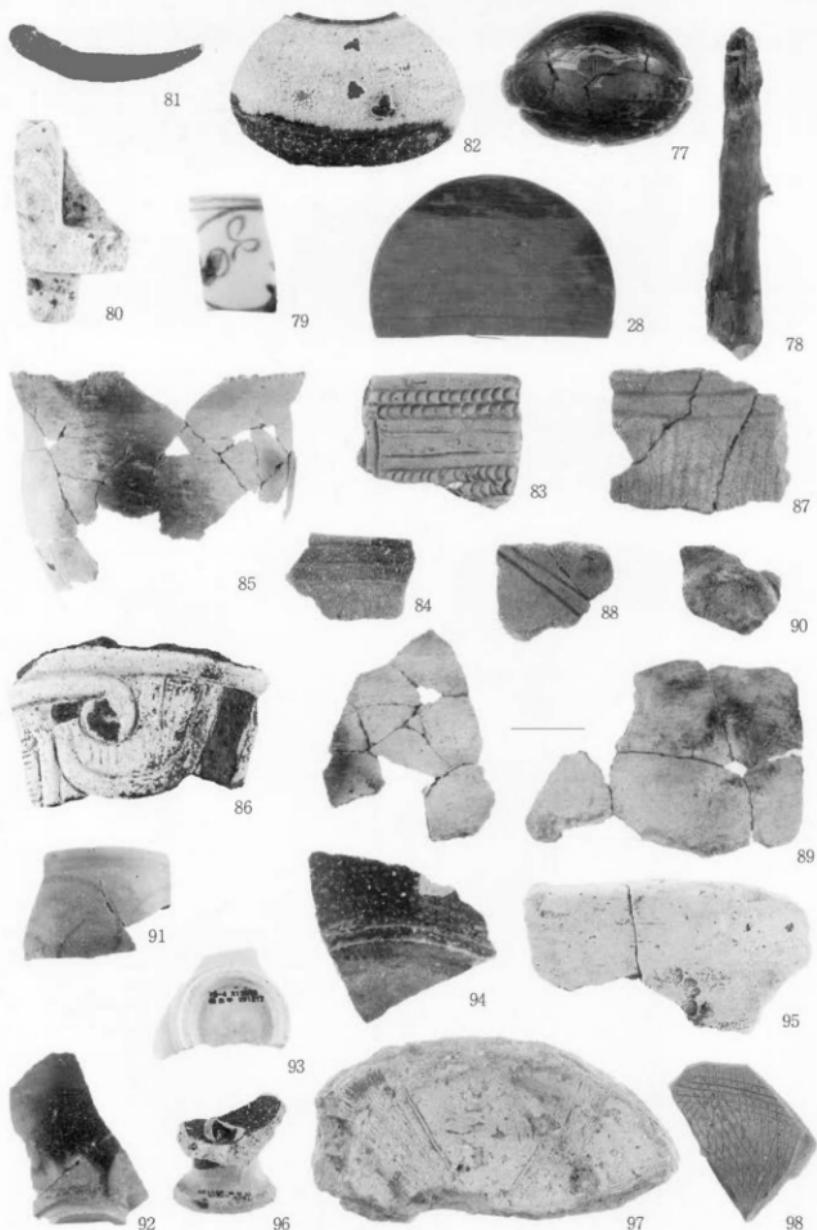
図版 10 高畠遺跡 4 地区の遺物 (3) (S=1:2. 但し 49・54は S=1:4)

35・46・49(SK21) 50~54(SK22) 55(SD2) 56~60(SD3)



図版 11 高畠遺跡 4 地区の遺物 (4) (S=1:2)

61~67(SD4) 68·69(SD7) 70~75(SD12)



図版 12 高畠遺跡 4 地区の遺物 (5)

79・80(P23) 81・82(P39) 28(SK12)

( $S=1:2$ , 但し 28・77・85・89は  $S=1:4$ , 78は  $S=1:8$ )

77・78(SD12) 83~98(検出時出土)

## 報告書抄録

| ふりがな          | とやまけんなんとし たかばたけいせき                       |              |             |                     |                |                       |                     |                 |
|---------------|--|--------------|-------------|---------------------|----------------|-----------------------|---------------------|-----------------|
| 書名            | 富山県南砺市 高畠遺跡                              |              |             |                     |                |                       |                     |                 |
| 副書名           | 市道高畠城端栄町線道路改良工事に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告（2）     |              |             |                     |                |                       |                     |                 |
| シリーズ名         | 南砺市埋蔵文化財調査報告書 27                         |              |             |                     |                |                       |                     |                 |
| 編著者名          | 宮崎順一郎 菅原雄大 竹中庸介                          |              |             |                     |                |                       |                     |                 |
| 編集機関          | 日本海航測株式会社                                |              |             |                     |                |                       |                     |                 |
| 発行機関          | 南砺市教育委員会                                 |              |             |                     |                |                       |                     |                 |
| 所在地           | 〒932-0292 富山県南砺市井波520 TEL (0763) 23-2014 |              |             |                     |                |                       |                     |                 |
| 発行年月日         | 西暦2010年3月15日                             |              |             |                     |                |                       |                     |                 |
| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地                              | コード          |             | 北緯<br>° °'          | 東經<br>° °'     | 調査期間                  | 調査面積                | 調査原因            |
| 高<br>畠        | 富山県<br>南砺市高畠                             | 市町村<br>16210 | 遺跡番号<br>580 | 36度33分<br>16秒       | 136度54分<br>44秒 | 091116<br>～<br>100125 | 1,442m <sup>2</sup> | 市道高畠城端栄町線道路改良工事 |
| 所収遺跡名         | 種別                                       | 主な時代         |             | 主な遺構                |                | 主な遺物                  |                     | 特記事項            |
| 高畠遺跡          | 散布地                                      | 縄文           |             |                     |                | 縄文土器                  |                     |                 |
|               | 集落                                       | 中世           |             | 掘立柱建物、土坑、溝、柱穴、河跡    |                | 中世土師器、珠洲焼、白磁、青磁、青花、漆器 |                     |                 |
|               | 集落                                       | 近世           |             | 掘立柱建物、欄列、井戸、土坑、溝、柱穴 |                | 近世陶磁器、笏谷石             |                     |                 |

### 富山県南砺市 高畠遺跡

—市道高畠城端栄町線道路改良工事に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告（2）—

平成22年3月15日

編集 日本海航測株式会社

発行 南砺市教育委員会

印刷 株式会社ショセキ